協力隊講座に対する
参加者の感想

（第 4 回）

昭和46年 7 月～ 8 月

日本青年海外協力隊事務局

ーはじめにー

協力隊夏期講座が終わり、参加者の皆さんより多数感想をよせていただき、ありがとうございました。

ここに、皆さんの感想を集録して、文集を作成することになりました。

この講座が、皆さんの協力隊参加への機となれば、幸いです。

JICA LIBRARY
1018790[4]

国際協力事業団
受入月日 '84. 5. 23
登録No. 06981
000
36
JV

北陸ブロック

投稿者

浅川髙安
浅川充
石川好春
岩田初枝
宇津君男
尾崎博一
亀井千都子
蜘手朋子
砂原佐世子
関本勇
善田康雄

寺崎勝義
当銘友子
中田光
早川四郎
堀籠勇一郎
山田卓生

ー初めたら最後までー

初めて参加した、3泊4日の夏期講座。内容が、わからなく、地理的にも遠方であったために当初とまどいを感じて申しこんだ。しかし今回、講座に参加できただけでも、私自身には、この4日間という日々を十分に意義ある生活にすることが、出来たと思っている。全国各地より集まった、同志と生活を共に、規律ある日課表の中で、日本青年海外協力隊自体を学び得、今までわからずじまいの点が解決され、よりいっそう自分を引き締めて、今までの自分の考えのありさまを、この機会に発見できたことに大変喜びを感ずる。

「始めたら最後まで」これが、私の信念というか、常日頃思っている目標のようなものである。「自分を反省して見る」この言葉は、誰れにでも出来そうでなされていないことだと思う。でもやらなくてはいけない。日頃平凡に過ごしてしまう生活の中では、この機会がない。せめて、講座期間中に夢をあくまで追ってしまう考えを、直そうとしたが、果して、協力隊という意義が私にわかりえたかどうか疑問に思う。

厳しさ、孤独の中で生活していたOBの方々を、見、また、「730日の青春」という映画で日本にいる時よりも、一層、不便の中で、耐えてすごしている姿を見て、私の顔がいささかゆがんだのを感じた。自分も映画にでてきた人のように……と思うと、あまりにも離れた距離感を覚えた。でも理想として、やはり、あの人達の如く、私にも出来ないことはないと思った。この講座にも4人のOBの方が出席され研究発表と分科会での座談会を通じて、現地で活躍され、そのものズバリを語っていただいた私としては、大変身近かに外国があると、思えるようになった。衣食住から仕事で詳細に説明してもらい、私も行きたいという希望と自身がでてきた。必要とされる語学を、これから真剣に学ぼうと決心した。

最後に、青年海外協力隊が、政府と事務局との二本立てで運営され、今日まで数多くの問題点を残しているようですが、室先生の講義のときに、質問がでたように、一年後には、はっきりとした路線に入ると云われる内部事情、私達

としては、一刻も早く、問題解決に努力されて、事務局で一本化し、また、この会の運営を積極的に押し進めてゆくことを期待する。

浅川高安

一参加者の意気へ感激一

今回の講座に参加して驚いた点は、金沢というやや不便なところにもかかわらず、各地から参加された人々の意気というか、協力隊への意気込みには、おどろかされた。

参加者の大半が社会人であり、それも、２０代中ばの人が、半分以上もしめていたこと、２０才そこそこの私には、意外というだけで、その後は、何も言葉がうかんでこなかった。

それだけ協力隊がすばらしい団体であるのかと、再認識させられた。

今回の講座、一口でいえば、大変有意義であった。これは決して主催者側に対しての方便でもない。３泊４日の期間内で肉体的、精神的に感じとったことである。学生時代最後の夏期休暇のうちで、一番の収穫ではなかったかと思う。

感想といえば、閉会式のときにもいったとうり、参加して、視野を広めることができ、また学校、寮等において、団体生活をしている私にとって、違った意味で、より団体生活の難しさを知ることもでき、直接、三日なり四日なり、社会人と接して、人間関係のあり方を考え、あじわうことができて、大変有意義であったと深く感謝している次第である。

ＯＢの方々に接して、海外に対する知識等を深め、また、体験談を聞き、海外への心は、より傾くばかり。反面では、海外に対する考えの甘さを知らされ、勉強の必要をも知らされた。

この講座において、学び得たことを今後参考にして、はやく、自分の希望を実現させたい。かつ、開発途上国に対して、わずかな力ではあるが、それらの国々が、はやく、先進国となるように、協力したいものである。

なお、今回の講座において事務局の谷川、宇佐見両職員、また、ＯＢで参加

いただき、助言いただいた沢、田村、阿部、小池各隊員には、深く感謝し、今後も御指導願いたい。

最後に参加された人々にも、有意義に4日間すごせたことも感謝する。

浅川　充

―自分の気持を確かなものに―

この講座に参加することによって、今まで知らなかった日本青年海外協力隊についての知識を得、あやふやな気持で、協力隊事務局に登録した、自分の気持が定まってきた。

というのは、事務局の方々の協力隊の説明、OBの方々の経験談、それに何よりも今、願書に登録した人々の気持、意志、意見など聞けたことが参考になった。

この北陸地区の講座の募集は、時間的に実施まで余裕がなかったので、会社等で休暇の許可をえるのに困難をきたしたのが残念である

石川好春

―もう一歩進んだ論議を―

夏期講座に参加したのは、いわゆる、開発途上国といわれる国々の現状を知りたかったことと、隊員OBの方々の意見を聞きたかったことの2点であった。

諸国の現状については、毎月来る「若い力」を読み、新聞等を併せてよめば、つかめる程度で、さほど参考になったとはいえない。

隊員OBの方々の講座は、生の声という点で、やはり参加しなければ得られないことだった。誰かの意見にもあったが、3泊4日の期間からすれば、OB4人というより、もう2～3人の声は聞けたように思う。もう少し多くの人々のお話が聞きたかった。田村氏の率直な意見も参考にはなったが、各々やはりその国で得られた体験談であり、他の国で生活していたら意見も違ったと思う。この事からして、もう2～3人の準備を願いたい。

私個人の職業柄、一番参考になったのは、小池女史の話であった。

我々の勉強不足を棚にあげて、こんなことを書くのは心苦しいのであるが、与えられるだけの講座であった。質問タイプもあるには、あったが、はっきりした態度のない研修生であるために、皆な自分の意見をもっていない。またとないチャンスであるから、もう少し有意義に使いたかった感がある。たとえば事務局の方で、こんな点についての質疑応答などの時間があるから参加者は用意しておいてくることなど、指示しておいてもらっても良かったように思う。

お互い、各々の生活のある者が集って、1つの夢、目的について意見を交換しあう状態は、興味深かった。ただ、意見が少なく、消極的であった点が残念に思う。

しかし、全く知らない者、同志であったが、若者のうちとけやすい、信じやすさが、そんな物をすぐにはねのけて、リラックスして過ごせた。運営担当者が、同年代の方々だった点、大きく影響していると思う。ただ、リクリエーションの時間を多少とりすぎたように思う。

今度再び、チャンスがあれば、1，2の問題提起があらかじめあって、それに関して互いに意見を用意し、交換しあうようにすれば、おもしろいと思う。かつ、活発な場がもてたのでは、なかろうか。

海外への技術援助とは、どういうものなのか、外国へ行ってみたい、そのことから集った集団であった。

自分の知識のなさを深く反省すると共に、もう一歩進んで、話しあいたかった。

かなり欲ばりすぎたかもしれないが、「貴重な時間を来ていただいた隊員ＯＢの方々には、本当に感謝しています。

チャンスがあれば、また参加したい。久々に学生時代に帰ったようである。

岩　田　初　枝

―<目は海外に>―

夏期講座に参加して思ったことは、参加者には、いろんな職業の人がおり、その気迫が鋭く感じられ、OBの方達のもようが、よく聞けてとてもうれしい。また、隊員OBの気迫、忍耐力、重労働から生れた多くの技能は、現地に、これからも生きつづけると思う。

隊員O・B の話を聞いていると、今まで以上に海外へ技術者として行ってみたくなりました。

OBの人達のようには、いかなにしても、自分一生の一代事業で海外に、出て、自分というものを見つめ、少しでも、広い世の中を見たい。自分の技術が海外に出て通じるか否かは、わからないが、講座に参加して、強く海外にでてみたくなった。自分にとって、この講座は、大変有意義であった。かつ、さまざまの職業の人がおり、多くの意見を聞けてとてもよかった。これからも参加したい。

宇　津　君　男

―心の励みに―

講座参加の感想は、良かったということである。参加者の職種は、違っていても、夢をもち、同じ方法で、海外へ行こうと、ファイトを燃やしている仲間が沢山いたので、不安であった自分の心の励みになった。

また、協力隊とは、どんなものかというように、具体的に、物の考え方、参加するために必要な技術の程度、また、しなければならないことなどが、今回の講座で明確にでき、うれしい。今後も、できるだけこのような講座が、開かれることを望みます。

講座に対して、(1)もっと隊員OBの方との話しあいの場を多くしてほしい。(2)1つの問題に対して、討論の場が少なかった。(3)プログラムに、参加者の考えを入れてほしい。(4)参加者全員が、協力隊に関して話せるような、知識を与えてほしい。そうすれば、講座の意義が明確になろう。食事も相手の方にまか

されましたが、自分たちで作ったり、隊員ＯＢを囲んで食事をすれば、話しあうこともでき、互いに協力しあうので親睦を深められるでしょう。

尾崎　博一

―日本人の心を伝えたい―

金沢まで着き、バスにのるまでの不安な気持。そして登ったあの坂道。緑にかこまれた山々の美しさ。なんと空気が澄み、おいしいのであろうか。鳥の声に虫の声。このように恵まれた環境にては、人の心も美しくなろうと楽しさで一杯になった。

盛り沢山のスケジュールに圧倒され、ついて行けるものかと思われたが、何もなく、スムーズに進行された日々、まことに感心するとともに感謝したい。

私の求めていた疑問、現実の様子が、各々の研修により得ることができた。

考えていたより、現実の厳しさがひしひしと伝わり「我が国」を再認識するとともに、一層「日本の国」「日本人の心」を海外に伝え、理解してもらいたいという気持にかられた。ともすると、マスコミにより、日本のうき出た部分のみが強調され、「心」よりも「組織」として、日本を理解させられてしまいがちなのが、誠におしい。その前に、日本人として理解される方が良い。この研修に参加して、私の初心である「日本人の心を伝えたい」という意志が強くなった。

最も感心し、楽しかったのは、目的を同じにするものの集まりとして、無駄がなく心が一致し、すっきりしていたことである。

第二は、ＯＢの方々、事務局の方々と何のへだたりもなく、生活できたこと、お部屋は、ＯＢの方々と一緒であったので、よくお話が聞けて楽しかったことである。

最後に青年海外協力隊の一層の発展をお祈りいたします。

亀井　千都子

ー同じ仲間の連帯ー

朝からどしゃぶりの中を、赤い傘さし、運動ぐつ、運動シャツなど入った重いカバンをさげて駅へ向った。

今年の3月頃、協力隊のことを知り、すぐ願書を提出したが、登録したという通知だけで、その後何の連絡もなかった。そのうち協力隊のことも忘れかけていたとき、講座開催のお知らせが郵送されてきた。「あっ、忘れられていなかった」と大喜びであった。しかし仕事が忙しく、4日間、どんなことをするのかと不安で申込みを躊躇しているうち、再び開催のお知らせがとどき、申しこんだ。

青年の家へ行く途中、どんな人達が集まるのか、初めてで、ついて行けるだろうか、変った人ばかりじゃないだろうか、と心配しながら向った。しかし開会式頃から次第に慣れ、心配も興味へと転向した。聞くこと、見ること(スライド等)めずらしいことばかり。

私と同じ目的を持った人が、こんなにいて皆な真剣に考えていると思うと、自分も「がんばらなくちゃ」と感じた。

やむをえず、出席できなかった方には悪いが、出席者が少なかったため、2人のO・Bの方と一緒の部屋で、4日間過ごせたことは、私にとって、最大の喜びであった。O・Bの方々は、2年間、海外で活躍されたから、どんなに強い人だろうと、謎であったが、やさしく理知的、魅力的な人々で、大きな力を秘められた。おだやかな海を思わせた。私も少しでも、あの人達に近づけたらな、と思った。

単純な私には、研究発表や、スライドを見聞きしていると、もう自分が隊員となって、がんばっているような気がして、我ながらおかしくなった。

同じ目的を持った人、目的を果してきた人が、あつまった生活の中にいると、皆な考えていることが同じで、純粋な気持になれた。

たった4日間でも素直な気持で協力隊のことを考えることができたのは、本当によかった。この気持を、いつまでも続けることは困難である。同じ目的を

持った者同志、連絡を取り励ましあってゆきましょう。

今度の講座で、私のなかは、あきらめていた気持に、良い刺激となった。他の人に負けないよう勉強しなければならない。

蜘手朋子

ー運営方法に対する注文ー

感　　想

1）　隊員O･Bは各分野から各々来てもらいたかった。

2）　全体のディスカッションもやるべきである。

3）　この講座を楽しんで受けられたと思う。

しかし、何かきびしさというものが欲しかった。

4）　3泊4日は、人によっては受けにくいかもしれない。2泊3日あるいは1泊2日で何種類か、行なったらよかろう。

5）　もっとこの事業をアピールすべきだ。

以　　上

砂　原　佐世子

ー現地と日本との細い糸にー

夏期講座に参加しようと思ったのは、自分の持っている考えを、帰国隊員及び講座参加者の意見を聞いて更に、固めたかったからである。

自分が、協力隊に参加しようと考えるようになったのは、長い人生の中で、青春時代に外国に行って自分の姿、日本の姿を客観的に見たいと思ったからである。行くことは、旅行すればできるが、現地のうわべのことしか知ることができない、と思っていた矢先、協力隊を知った。現地人と一緒に生活し、自分の仕事が生かせることは、興味のあることだ。仕事を通じて現地人と心から語りあえる友達になりたい、私が日本と現地との細い糸になりたいと思って協力隊参加を考えた。

そんな考えで夏期講座に出席した私には、帰国隊員の話が、自分の考えをゆさぶるようなものだった。自分の思っていたよりも、きびしい現地でのこと、また1つのことをなしとげた喜び……

彼らは笑いながら楽しく話してくれたが、それだけに苦労も大変だったのではないかと察した。彼らが、笑って話せるのは、苦労及び現地のきびしい仕事に打ち勝ったからではないか？　自分よりもひと回りも、ふた回りも大きく頼りがいのある人に見えた。彼らが、うらやましく、また嫉妬をも感じた。

自分の持っていた考えが甘く、しかも机上論であったことを反省し、かつ自分は、是非協力隊に参加したいと、益々ファイトが湧く思いで一杯である。

講座参加者も、しっかりした考えをもっており、さすがと思うときがあった。講座はきびしくも楽しい団体生活であった。日頃運動をしていない私には、運動時間後、体の節々が痛み苦しかったが、これを機会に運動をやってゆき体をきたえて、協力隊志願者として恥ずかしくないように努力し、一歩でも近ずきたい。

関本　　勇

ー現地と日本との細い糸にー

人間とは、弱いものか、それとも僕が人一倍弱いのか、何するでもなく、漫然と怠惰な時を過ごしてしまうことが多い。確固たる決意のもとに或る目標に向って力強く生きたいとは願うものの、今のところ、全心全霊をぶつける目標もなく、身を震わせるような関心もなく、ただ現在の職業を考えて、あまりにも平々凡々、これからの僕の人生は、何事も、すでに決っているように見えてしようがない。もっと未知のものを求めたい、若さをぶつけたい、そんな時、夏期講座を'若い力'で知り、海外目ざして夢多き若い人々と語りあい、幾分でも、その意欲をくみとり、刺激されて、自分もしっかりしたものにしつづけようと欲して参加した。

なるほど、いろんな人が、いる。僕と同じ年代の人が、いろんなことをやっ

ておられることを知り、非常にうらやましく思うと同時に、私も力強く訴えられて良い刺激になった。この3泊4日の日々は実際楽しかった。O・Bとの話しあい、映画、スライドあり、またバスケットの試合に勝ったことは、普段、皆なで試合することが、ほとんどない私にとって久しぶりに晴れやいだ気持になれた。ただ、ちょっと欲をいえば、O・Bとの話しあい、分科会とも同じようなものが続いた感じで、バラエティをもたせる意味で討論会などをやっても良かったのではなかろうか。海外派遣を希望する人達であるから、それなりに、人生について深く考えていると思う。

兎に角、久しぶりに伸び伸びとした、生きた心地のした日々を送らせてもらった。また今まで、ただ希望的観測で僕も行ってみたいと思っていたにすぎないが、これで気持がきまった。

善　田　康　雄

―もう一歩の計画性を―

私は、夏期講座に途中から参加させていただき感謝している。この2日間でO・Bの方々の体験談や映画、スライドによりアジア、アフリカの様子を見出し、ディスカッションによって協力隊参加にファイトをもやし、目的は達せられたと思う。

ただ欲をいえば、出席O・Bの人数をふやし、多種類の派遣種目について説明してほしかった。また、スポーツやハイキングは、講習生の親睦を深めるには、良い志だと思うが、もうすこし計画性がほしかった。

さらに、講習生同志でアジア、アフリカについて討論を行なえは良かったと思う。

寺　崎　勝　義

―派遣体制の確立を―

夏期講座に参加したのは、衛生検査技師の派遣要請も近いだろうと考え、協力隊についてもっと知りたかったからである。でも参加してみて、まだまだ待たなければならないようなので少々失望して旅行の予定を切りあげて帰ってきた。電車の中でハタとひらめいた。何も要望のないところについて、何とかやれるようにするのが協力隊の心意気ならば、事務局で派遣したくなる体制を作ろうではないか。帰国隊員の話を聞くと、どこかの国で臨床検査センターを作りたい。どこの国でも町には医者が要るらしい。しからば、この医者を相手に検査センターを開設すればよい。今さら医者に病気の治療、診断、検査の必要性を説くまでもないでしょうから、検査データーが正確であることがわかってもらえれば、やってゆけそうな気持がする。

まず、センターを開設するには、グループで現地へゆきたい。エル・サルバドルで体育学校を作ったように政府が協力してくれればよい。

機械や試薬を持参しても現地で、日本と同じようにのんびりとは、できないと思う。

O・Bの方々との雑談では、事務局の人が、いるところでは聞けないような話が聞けてよかった。

当銘 友子

―隊員の人間性の発見―

日本から外に出たことのない私は、協力隊の知識は、あまりなく、新聞でしか、海外のことは、わからなかった。察するところ、開発途上国にも大学、専門学校などがあるのに、なぜ、日本の知識、技術、技能を奉仕しているのだろうか。日本が経済的に楽になってきたので、うぬぼれて、他国にめぐんでやって自己満足しているのではなかろうかと考えていた。

しかし夏期講座に参加してから、開発途上国の人達の仕事に対しての意欲のなさ、技術者の少なさ、彼らの仕事に対する高揚心の少なさを知り、一方、我

々が手をさしのべてやれば、長い目でみて彼らの国のためにもなるということなどを講師、隊員O・Bの方々から聞かされて、今だ信じがたい気持を持ちつつも、これならば、低開発地帯に対して、日本青年海外協力隊が必要であると考えさせられた。私の進った考えに気づき、また新らしい事実を知ることができて大変よかった。隊員O・Bの話を聞いて充実した青春を送ってこられた彼らに手の痛くなるほど、拍手を贈った。この後での映画「730日の青春」を拝見して、深く感銘した。2年の任期を延長する隊員、徹夜で働く隊員、彼らは、730日間、自分の持っている情熱を全部燃やし続けたように見える。海外協力隊員は自分を犠牲にしてまでも開発途上国のために奉仕している、まるで神様みたいな人間だなあ、私には、このような奉仕は、できるだろうか、隊員には、とてもなれそうにないとガッカリしながら映画をみていた。映画の後で、隊員O・B、田村修氏に「730日間自分の持っている情熱で1つの仕事をやりとげた満足感は、あるだろうが、情熱はその日で切れてしまわないか、帰国後、他国の目標に向っても情熱を燃やすことが、できるでしょうか?」とたずねると「あの映画は、730日の生活を1時間に短縮したので、2年間、毎日全力投球しているように見えたのである。本人が持っている情熱を本当に燃やせるのは100日であろう。あとは一生懸命に仕事をしているだけである。半分は奉仕で半分は、自分のために働く。」と応えられたので、安心した。やはり、彼らも人間であったのだ。急に意欲が湧いてきた。この講座で得るものが、たくさんあった。

私は、夏期講座の最後の日に、班別で便所掃除をしたが、彼らのように奉仕の精神が、あるならば、初日から進んで便所掃除をやるべきであったのに、当番にあたらなければ、やろうとしない私、隊員O・Bが損得を度外視し、開発への寄与の目的で奉仕したのにくらべ、私には、まだまだ奉仕の精神が欠けていると思う。

青年の家に入った時は、協力隊の講座に来る人が皆な立派な学歴、技術の持主で、はたして私がついてゆけるだろうかと心配した。しかし1日、2日たつ

うちに親しみが湧いて来て、いつしか口を開き冗談を言い、帰る時は何年来の友のように親しくなり、自分の目標を持って、いつの日か隊員になれるよう励ましあって別れた。

ただ隊員O・Bの方達に無理をいえば、現地で実際に手がけた仕事を半分でもスライドにて見せていただければ更によかったと思う。

中田　光

ー天孫族の人種改良に役だつことをー

協力隊講座に参加させて戴き、本当に良かったと思う。

小生の nihilistic, consciouly, sneaky, narrow-minded, basicaly honest but circumstace does not permit me to be honest, trecherous, self-destructive, self-deseiving な生き方がいかに愚かであったかと云うことがわかった。

O・B，O・G，先生，係員の blood-circulation と personality を極端に変えようと決心した。

とかくこの世は住み難いという東洋的痴呆状態、Oriental mental dimentia に陥ちいる routine everyday grind からのがれでる可能性があるということは大変楽しいことである. 恐らく、派遣前のO・B, O・Gと帰国後の彼らとでは、人種が違うと思う。

O・B，O・G、先生、係員の皆さんの輝く、明るい瞳を拝見して、現在の自分の cold-blood-insect のような sneaky, gloomy な瞳に plastic surgey を受けても変えてゆきたい。現在の私は、前途遼遠、暗中模索であるが、なんとかしてゆきたい。

'What I am now is one thing, what I'll be which the Irony of fate will decide, will be another' という私の夢を、たとえ世間が笑おうが、また第四次元の世界に住んでいると批評されようが、果てぬ夢を追い続ける決意である。

小生の個人的な見解が、たとえば、英語を知っていても知らないふりをしたり、長い物には巻かれろ式の反民主的な生き方、誰かが、まちがった英語を使った場合に、ケラケラ、stab each other's back するだけで積極的に you should say と云わぬ処生術(恐らく I used to be we used to be)を本当に愚かなことだと思う。

海外協力隊をもっと大衆に普及すれば、小生のような気違いが続々と現出するであろうと確信する。

海外協力隊が、国際親善と世界一優秀な日出ずる所、高天原の天孫族の人種改良に役だったであろうことを確信する。もし the Irony of fate が、そして If the Lord is our friend, そして something が……so for so for……帰国した暁には、自分は協力隊講座の講師にでもならせて戴ければ、幸甚の至りである。

早 川 四 郎

ー個人への野望の高揚をー

今回の講座では、参加者皆なが、協力隊員としての海外への野望を持ち大変によかった。ただ団体生活からうまれた野望ではなく、個人への野望を聞き、それに少しでも近道となる助言をしてもらえたらさらに良い。

O・Bだけの一方的な話だけでなく、参加者同志の話しあう時間もほしかった。

また講習の場所は、室内だけでないほうが良い。さらに講座をうけて半日もたてばお互い気ごころが知れて友達になれるように、名札は皆な必ずつけましょう。

堀 籠 勇一朗

ー我が国の役割の再考をー

私は、小さいころから海外へのあこがれがあり、会社に入って仕事を覚えてきたら仕事で海外へ渡りたかったが、イナカに住んでいるため情報が、なかな

かキャッチできなかった。そこで最初に入った情報が協力隊であった。さらに今回の講座で室企画調整室長から各国のボランティアの話を聞いて、協力隊が世界各国の社会開発の一翼を担っていることを感じた。是非行きたくなった。観光のまつり気分で海外に行き、相手国の人に迷惑をかけるような旅行はしたくなかった。

「日本株式会社」と言われるほど、我が国、自国の利益を追求してきた現在、このへんで決算して反省しなければいけないと思う。日本が良くなったのだから、今度は遅れている国々を引きあげてあげなければ、いけない。

「奉仕」という言葉は、どうも私には、ひっかかる。協力隊が相手国に対して行なうのは奉仕であると思うが、個人的には、国内にいる時よりも相手国において高い給与が与えられているからである。

協力隊の現地での活躍は、「若い力」を通して少しずつ知ってきたが実際にO.Bに会って話を聞き大変参考になった。欲をいえば、もう少し多数のO・B及び国、業種を選んでほしかった。

「730日の青春」の映画を見て、隊員たちが、青春を仕事に燃やしているすばらしさを感ずるとともに自分もあれほどにやってゆけるかと自問した次第である。

4日間仕事からはなれて、同じ希望をもつ仲間と集団生活をして気持を新たにした。

スケジュールの中にスポーツやレクリエーションなどが入れてあり良かった。このような講座を、できるだけ多くの人がうけられるように各地で行なって下さい。また協力隊の存在が、はっきりしていないようなので一般の人々に大いにPRして国民が「我が国では、このような事業をしているのだ」と認識できるようにしていったら社会的に位置がハッキリして事業もやりやすくなると思う。

山田卓生

九州ブロック

投稿者

緒方代志

梶原スエ子

古賀和子

坂川幸子

須藤明美

田中実

水上哲実

本兼光

山本宏

吉田芳男

―勉強すれば隊員になれる―

本当に有意義な4日間であった。O・B隊員の経験談を興味深く聞いた。

東南アジア、アフリカで、現地人のために働くことの難かしさ、現地人と接することの難かしさを「若い力」で知ってた以上に、知り得て、不安を覚えた。反面、O・B隊員に直接会うことができ、今まで夢のようにあこがれていただけでの私であったが、勉強すれば、隊員になることができる。隊員になって現地人のために働いてやろうと決心できた。

残念に思ったことは、女性のO・B隊員の話を聞けなかったことである。しかし松田女史に女性隊員の様子を少し聞けて参考になった。

また、いろんな人と接し、また意見をきくことができて楽しい4日間であった。

この講座に対しての希望として、もう少し協力隊の仕事の内容・目的・意義などを話しあう時間があったら協力隊をより深く知ることができたのではなかろうか。

今年は、1度も質問、意見を云わなかったので半年は、ちゃんと準備して講座に参加したい。

緒　方　代　志

―心身の強堅さの必要性―

貧しい国での社会福祉の一端に、2年間でも精一杯とりくめたらと、漠然としたあこがれのようなものから、夏期講座に参加してみたが、講義が進むにつれ、私の考えの甘さに気づいた。

語学は、もとより派遣国の実状を知らなすぎ肝心の福祉活動が、どの程度まで、すすんでいるのかさえ、私も知らなかった。

O・Bの方の体験発表を聞いていると心身の強堅さが人一倍必要ではないだろうかと思ってもみた。

どう考えてみても今のごく平凡な私には、たりないところばかりである。

この状態で隊員になるのは遠い夢のことであるが、低開発国の福祉とまで行かずとも風習などについてもっと知識を得たい。

スケジュール及び内容についてはよかったと思う。

梶原　スエ子

ー派遣の可能性のなさに失望ー

講座に参加してよかった。それは、「協力隊というものが、一部分にしろ、のぞけたこと、思ったより多くの人が登録していて意欲的であったこと、友人ができたこと。」のためである。

毎日のんべんだらりとすごしていた私にとって、たとえ数日であったにしろ規則的な生活がおくれたことなどなど、いろいろあげればきりがないが、我が家に帰る時、及び帰った後も心の中に満足心がずっと残っていたことだけでも大いに意義があった。

しかし、反面今度の講座は、ずい分残酷だとも思う。登録して、私にも少しだけ外国に行って活躍できるというチャンスがあると期待していたことが、みじんにもうちくだかれて夢を見るだけではいけないという現実が手をひろげてきたからである。

生花でしか登録していない私など、派遣される可能性がほとんどないと思うといささか失望である。それでも勉強だけはしようとがんばっているところである。

古賀　和子

ー人間の本質は、どこにー

講座に参加する前に、私自身幾つかの問題を持っていた。それらを集約すると海外技術協力とは一体どのような立場で何をするということかである。海外といっても開発途上国に限られ、それらの国々へ技術を持って援助すること、そして文明国である日本のような国に少しでも早く近づけること、と

いうのが正解であろうか？しかし追いつくであろうか。また文明国に追いつくことが必要であろうか。文明国とは、開発途上国とは何であるのか。文明国になれば、人間は平和を得るであろうか、等々と数限りなく疑問がふき出してくる。いずれにしても私自身海外の土地を踏んだこともないわけで、考えることも、同じ輪をまわりつづけているようで仕方がなかった。

ここに夏期講座に参加して次のようなことを考えた。O・Bの生々しい体験談を聞き、耳を傾けるほどに開発途上国は、その本質を持っているのである。それは人間の本来の姿というか、すっかり何もかも分化され発展し尽したかの文明国の見落している、あるいは見落しがちな本質的なものを沢山所有している。

私自身、文明国だという日本にポンと生まれて来て、全てが中途から出発させられてきたように思う。長期間受けた教育も、そこで働いた企業の運営も一丁度インスタントの食品のように便利さ、使用方法は、すぐ覚えたが、それが何から出来て、なぜつくらねばならなかったかは、ずっと後の方で気がつく、あるいはわからずに終わる。それで弊害がなければいいが一といったように中途からまた先へ先へと走ってゆくような気がして、人間の本質がおいてきぼりをくっているのではないかしらと、その走る速さにアクセクし、ガックリ肩を落したり。しかし開発途上国には、その本質がある。とにかく開発途上国と文明国とが深い交流をもって理解し合い、調和してゆくことが非常に大切なことではないかと思う。開発途上国がいいか、文明国がいいかは、わからないにしても、とにかくどちらかが仕合せな国であるか、いえないのだから。

いま、この自論を得て自分だけうなずいているようだが、自分自身の内部は、ますます鼓舞される思いで、本当にこの夏期講座は貴重な機会であった。

坂川　幸子

一内容に具体性を一

中学時代から私の家に「若い力」が送られてきたので、青年海外協力隊の活動について漠然とした考えを持っていた。

最初のころは、あんな未開発国に行って働くなんて妙な人もいるものだ程度の考えしか頭に浮んでこなかったが、隊員がボランティア精神を生かして働いているのを読むにつれて、次第に尊敬の念を抱くようになり、私にもやれないだろうかと考えるようになった。

何か人の役に立ちたい一この願いは、誰でも、若い時に一時は心に抱くと思うが、私も実際にこの考えを行動で表わすには如何にすべきかを強く考えた時期があった。その１つとして協力隊の仕事に強く心を動かされた。しかし協力隊の仕事だって「わざわざ海外にまで出てゆくことは、ないじゃないか。この日本の中だってまだまだ文明から取り残されて暮している地域が沢山あるじゃないか。結局、私が隊員の仕事に興味を持ったのも一種のカッコ良さに憧れているのではないか。自分の行為は偽善ではなかろうか。こんな疑問が次々に湧いてきた。

私にとって、今度の夏期講座を新聞紙上で偶然知り得たことは幸運であった。すぐに参加する手続きをした。

それまでの自分のモヤモヤした気持を一掃して参加する決心がついたのは、主に協力隊の活動について他の人が、どんな考えを持っているかを自分の目で確かめてやろうという考えからである。隊員O・Bの意見が聞けることこそ、この機会をおいて他には、ないと思ったからである。それまでしばしば、テレビ等で耳にしたことのある、協力隊の活動の意義についての疑問もこの講座でときあかせるだろうと思って参加した。率直にいって講座で納得のゆく説明は得られなかった。隊員O・Bの話も大部分は、旅行から帰ってきたばかりの人が行なう説明会のような感じがした。現地の生活については、本やマスコミの働きによってある程度知識を得ることができるが、果して現地の人々が隊員の活動についてどんな考えを持ち、現在その成果がどのくらいあがっているのかは、その活動を自らの手で行なった人でないとわからないと思う。この点について具体的に説明してほしかった。

現地で、ただ米が植えられるようになって喜んでいるのは当然でしょう。そ

れを数字の面から実際に、どのくらいが、どのくらいの水田で、どのくらい収穫をあげ、以前とどの程度生活様式が変化したかを知りたかった。

しかし一方、この講座に参加して、それまでの自分の考えが、甘かったことを思い知らされ、この点で富田先生、隊員O・Bの方々に感謝したい。単にファイト、気力にあふれている者ならば技術面では、さほど高度でなくてもいなどと安易に考えていたが、改めて技術面の重要さが、わかり、再び不安感にとらわれる思いがする。それは、私には誇れる技術もないし、それに見合うだけの能力もないから、自分が、協力隊の活動をできるかどうかが不安になってきたからである。

講座が終って10日余りたって、ただ1時期の感情にとらわれることなく、本当に協力隊の働きを理解して応募を希望しているのかどうかを慎重に考えなければならないと感じた。

須藤明美

ー協力隊参加が私の夢ー

今回の夏期講座に参加できて本当によかった。今後も是非続けてほしい。

現在、日本いや世界には数十万の若者達が色々な思想のもとで、自分の生涯をどう生きてゆくか、と悩んでいると思う。私もそのうちの1人であるが、自分なりに、私は、人に負けないような夢があり、それに近づくために努力して来た。

しかしこの数年間の日本経済の流れは、目に見えて激動してゆく。その流れに対して自分は、どうたち向かい、どう生きてゆくべきかと悩んでいた。

O・B隊員の経験談や富田先生、上村先生の話を聞いていると自分の夢、いや自分の生涯をどう進むべきなのか、ということで、私にも道が開かれて来たようでファイト、ファイトと胸の中で何かが叫ぶ。

世界の情勢を海外へ出て知り、また見る。そして激動する日本経済の中で、自分の道を一歩一歩進みながら生きぬく。

1日も早く技術を会得し、海外協力隊へ参加することが今後の私の夢である。

田中　実

ー人生への指針にー

第1次試験に合格はしたものの、自分の行動力にまかせて肝心の精神面の整理ができていない矢先に、夏期講座のことを知り大変興味をもっていた。

まず、この研修で得たことは、協力隊事業のこと、のみならず、自分の人生を考えた場合、その基調とすべきものを自分なりに確立できたことである。このことにより協力隊員への夢は、より強いものとなった。

隊員O・Bの方々からの生の体験を聞いて隊員としての2年間が、いかに意義深いものであったかを知ると同時に、その困難さをも知らされた。とにかく私は、この研修が今までにない貴重な体験であったと思っている。

また今回の場合霧島登山もできて、これも研修を盛りあげてくれた1つであると思う。

ただ1つ心残りなものは、協力隊の事業そのもののあり方についての疑問が多少残ったことである。今後もこのような講座をぜひ設けてほしい。

水上哲实

ー海外行きの実現をー

今回の協力隊講座は、あらゆる意味で僕の内なるものの闘志を力いっぱいに防ふつさせてくれたような気がする。それというのも隊員O・Bの魅力ある話が自分の目をはっきりと海外にむけてくれたことを感謝せずにはおれないからである。

ケタはずれにおもしろい津留さんのケニアの話、カンボディアの政変の中から自己を開眼させ、そしてバレーボールを通じて同俗、人間教育に励まれた大窪さん。マレーシアの風俗、習慣のギコチなさへ竹細工をもちこんでその指導の工夫をはかった久山さん。

貧富の差の大きいフィリピンのまっただ中に若いエネルギーをぶちまけた山田さんの話はスライドを通じてより現実感があり、興味をひいた。私は海外というものを少なからず自分のものとしてとらえようとしたことは確かである。

あのダダッ広い風土の一角に自分ならどのような形で若さをぶちまけるだろうか。また自分の持つ行動力と、バイタリティをどのように存分に生かすことができるだろうか。「あゝしてみたい、こうしてみたい。」としきりに自分なりのアイディアをだして試行錯誤することの楽しさにあやかって僕の心はいつしか海外へとむかっていった。そしてO・Bの話の端に目に見えぬ苦労と1つの仕事を克服した充実感らしきものがあるように思えた。

それから冨田先生の哲学の講義の中での「余剰エネルギーからヒューマニズムが生まれてくる」という論理は自己の豊かなパーソナリティを形成するうえで最も意義深いものであった。「余り」というものが自分には不足している。それは海外に行くことによって少なからず「余り」の怖さに耐えることができるような気がしてならなかったからである。是非海外行きを実現させたい。

29日の野外活動で笠井さんが下山のとき、スルスルとすべりこけたのも面白かった。おかげで道づれ、親しみやすい人間性に触れたような気がした。いろんな友人もできた。ユーモラスな松田さんとスイカをガブついたのも楽しい想い出となった。

これらの夏期講座の貴重な体験を通して、もう1人の自分を発見したようでもあり、新たなるファイトが、どこからともなくこみあげてきた。

ソマトニアンとビセロトニアンの精神をモットーに今後頑張りたい。

本　兼光

一世界平和のために働きたい一

今回の夏期講座は、自分の将来の思想、目的、希望に対して良い影響を与えてくれた。

参加者の中では最年少の組であった。福岡の学生の中では一応、一人前の考

えを持っていると思っていたが、参加して、ディスカッションや就寝の時に諸先輩方の話を聞いて、今までの考えが、何となく頼りないもののように思えてきた。しかしその中にあっても自分なりに何かをつかんだような気がする。今は具体的にわからないが、家で一体、講座期間中、何をつかんだのかじっくり時間をかけて答を出してみたい。今度の研修によって得たものとして、海外へ出るための資格をとるには、どこで勉強したらよいかを見つけたことだと思う。O・Bの津留先輩に教えてもらった訳であるが、自分が決断したことによって自分自身一歩前進したように思う。

稔島のあのすがすがしい空気は、自分の堅いはずの決心が、ゆらいだとき、決意をはげましてくれるものの1つだと思う。これから先は、稔島青年の家の研修を大きな足がかりとして、不屈の信念のもとに大きく飛躍し、日本の将来のために自分をあのキャンドルサービスのローソクの炎のように燃やし続けながら、ひいては世界平和のために働きたいと思う。

山本　　宏

—共通の目的への努力—

私が協力隊夏期講座に参加した理由は、協力隊の組織の内容と派遣の実状を知ること、O・B隊員の生の声を聞くこと、そして協力隊参加希望の諸君と話し合うことであった。稔島での講座では以上のような希望を満たしてくれるような講義、ミーティングがあった。

O・B隊員の各国の実情、派遣国での仕事の状態、それをやりとげるまでの苦労話を聞くうちに、隊員の仕事のきびしさ（仕事のみならず日本の青年代表であること）を身にしみて感じ、また仕事を達成するまでの努力を通じて自己の可能性を広げることができると知り、勇気づけられた。協力隊の内容は、事務局の方の話を聞いたり、O・Bの体験談を聞いて、しっかりしたものだという確信を得ることができた。

またミーティング、ピクニック、その他でこの講座に参加した人達と交換し

彼らの意見を聞き、自分の考えを述べ、協力隊への参加という共通の目的のために皆な努力していることを心強く思った。

この講座は施設こそ不充分であったが、狭島の美しい自然の中で有意義な日々を過ごすことができたのは、事務局職員の努力とO・B隊員各氏の情熱のおかげであろう。

吉田芳男

瀬戸内ブロック

投　稿　者

安藤　順子
上野　ゆり子
木下　勘次
木村　博行
越本　大二郎
境　敬一
瀬戸谷　万千
多田　紘史
広瀬　孝司
広瀬　元義
深田　周平
福吉　喜代子

藤部　延夫
宮川　明子
和田　久
和田　恵子

―＜フィリピン映画に感動＞―

私が講座に参加した理由は、本当に単純なもので、雑誌に掲載されているのをみて、おもしろそうだからということであった。

実際に講座に参加する人達と顔をあわせ、自己紹介をしあったときは、こんなところへ来るんじゃなかったと後悔した。というのは参加者の職業が教員や会社員で、私みたいな高校生が少なく、皆な真剣に将来のことを考えていたと思ったからである。私は、しかし興味本位で参加したが大変いい勉強になったと思っている。私が今まで全然知らなかった世界のことを、おもしろ、おかしく、また一方きびしく教えていただいた。

私は講座に対する批評よりも自分自身に対して反省しなければないと思う。参加するからには、少しぐらい勉強らしきものをしておかなければいけないのに、まったく無知のままで講座を受けたのであるからなっていない。深く反省している。

もし今度また講座を受ける機会があれば、よく勉強してゆく。さらに注文として、私が集中力がないかもしれないが、2時間もぶっ通して講義されると、あとの方では、理解する力がにぶくなりなかなか頭に入らない。1時間づつにして5分の休憩をとってもらえば、2時間何とか耐えられる。また研究発表と分科会との時間は、プログラムの上で、はっきり分かれているのだから、きっちりしてほしい。更に、帰国した隊員の方が、もっと多く参加してもらえたらと思う。30人もいる中で手をあげて質問するのは勇気がいる。分科会のときなど、5～6人に対して隊員1人だと、いいたいこともいえる。それにもっと多くの話も聞ける。

今回の講座でよかったと思ったのは「フイリピン」のフイルムであった。なんだかすごく感激した。やはり話だけよりも実際に映画で見て解説してもらうとずっと効果がある。

また講座に参加していろんな人と知りあいになれて大変にうれしい。山登り誕生パーティーなどすごくよかった。私は皆なからバカにされないように軽く

パーマをかけて大人っぽくしていったのに、やっぱり幼稚園だとか云われてショックだった。それでもすごく毎日楽しかった。

無理をいうならば、反省会にも誰かが云ったように皆なでスポーツをする時間があればもっとよかった。でも青年の家の都合もあることで仕方がなかろう。

私は、こんなに良い機会に恵まれて大変仕合せである。20才になるまであと2年間あるが、それまでじっくり派遣というものを考えたい。

安　藤　順　子

一勇気をもって行動する人間に一

夏期講座に参加しないかと、申し込み用紙が舞い込んだ時は、何の変化もない平凡な生活に飽きあきしていたときだったので、何にも考えず夢中だったが、いざ広島駅に着いたら事の重大さに気が付き、私ってどうしてこう軽率なんだろうと後悔した。一刻も早く帰って母さんの顔を見た方が無難だと、いく度か思ったが持ち前の責任感と良心とが許さず(?)思いきってフェリーに乗った。

若さと希望に満ちた江田島青年の家、一見堅苦しい感じがしないでもなかったが、いざ生活してみると意外に気楽で、たまには、良いものだと思った。やはり何といっても同じ希望、目的を持ったものどうしが集まって話しあい行動するということは、意味のあることだと思った。いざ社会に出て仕事を持ち働いている。その生活に甘んじて視野も狭くなりがちだが、講座に参加して皆さん方のファイトある話を聞いたら、あらためて協力隊のあり方、意味がわかり、自分のこれからの生き方を知らされた。この貴重な経験でもう1度自分を見直し、改めるところを改め、伸ばすところを伸ばし何事も勇気をもって行動を先にする人間にならなければならないと感じた。今は、広島駅での出来ごとがおかしくてならない。

上　野　ゆり子

―講座運営に対する注文―

国立江田島青年の家での4日間は苦しくまた楽しい生活であった。

プログラム上の希望として最初に、研修生の皆さんと自由に話しあえる時間が欲しく、また場所もほしかった。

またいろいろな業種のO・B隊員の話をききたかった。僕は専門が車輌整備なのでそのような業種のO・Bの話をききたかった。

東南アジアに行くには根気のいる仕事をしなければならないことを、この講座において学んだ。それでも私は行きたい。

木　下　勘　次

―立派な青年の姿―

私は、今回初めてこの講座に参加したもので、スケジュールを見ただけでは、時間にしばられて窮屈そうだという印象を受けただけで内容がどんなものであるかわからなかった。しかし全日程を終えてみて、最初の印象ほど窮屈でもなく、かえって楽しく有意義な4日間であった。

講座の構成についていうと、講義、隊員O・Bの研究発表や現地でのさまざまな経験談、そして最後に隊員が実際に現地で若々しく活躍している姿を撮った映画の上映とゆくにつれO・Bの話を聞きながら、自分の頭の中で現地での隊員の姿を想像してみた。そして映画の中の隊員の姿と結びつけてみて、両者がほぼ一致した。この流れは、協力隊の実態を把握するのに非常に効果的な方法だと思う。

隊員O・Bの話を聞いて私が強く感じたことは、彼らの話す言葉や態度は、私のそれとは完全に違う。人間としての格が数段上と言わざるをえない。一体、彼らは派遣前からあのようなユーモアのある話しぶりや落ちついた態度が身についていたのだろうか。それとも2年間の任期がそうさせたのか、そのへんのことは、はっきり理解できなかったが、少くとも、派遣前の3ヶ月間の訓練を通してだけでは、あそこまでは無理だろう。かといって生まれつき、社交性の

豊かな人ばかりの集まりでもなさそうに感じた。隊員O・Bの方々を見て何といっても前向きの姿勢で何事にも全力でぶつかってゆく若さ、これこそが立派な青年の姿であるに違いないという確信を得た。

また海外協力隊は、私が考えていたほど、甘いものではなく、微妙で細かい神経を必要とするということも徐々にわかってきた。隊員1人1人の果す役割が、いかに大きく、重要なものであるかも改めて認識させられた。今後とも、こういった会合には、積極的に参加したい。

木 村 博 行

―講座を問題提起の場に―

「若い力」と新聞その他のマスコミにより協力隊の良い面、悪い面の両端は、ある程度知っていたが、現地における協力隊員の普通の姿、A・A諸国の状態、現地の人々の物の見方、考え方を知ることができなかったが、この講座を通じて幾分か知ることができ、現地の人々の問題点、現地における協力隊の問題点、また逆に私自身の協力隊に対する考え方の問題点など、さまざまなことが、自分の身近かなこととして問題提起できたのは大変、有意義であった。

自分の身辺に協力隊に関心を持った人が、いないために残念であったし、さみしい気がしていたが、講座を受講に来た人を知り、また自分と同じような立場で、同じような考え方の人が中に居たのを知り大変力強く思った。自分も一層努力しなければと決意を新たにした。

自分の専門分野である建築関係の隊員O・Bの方がこられなかったため、現地における建築関係の実状、問題点などの会話が、できなくて残念であった。

"青年の家"の時間におわれ、協力隊O・Bの方々の現地における楽しいできごと、おもしろい出来ごと、それに協力隊事務局のこと、訓練所のことなど充分にきくことができず、また充分な討論も、できなかったのは大変残念だった。

越 本 大二郎

ー映画が胸にとどまるー

今回の夏期講座で、学校で学べない日本青年海外協力隊の概要を、ある程度つかめたうえ、O・B隊員との交わりも深めることができたのは、さいわいと思っている。なお行事計画について、日程が少しなりとも狂ったことを残念に思う。また時間に左右されたことが非常にくやしく思える。国立江田島青年の家事態のことは、規律に関して大してきびしいとは思わなかったが、そこの行事時間にしばられ、これといったことができなかったのではなかろうか。もっと協力隊の時間を持ちたかったように思う。

また15日の夜、行なわれた映画は、特に良いものとして私の胸にとどまった。この映画により、なお一層、協力隊参加への志望は強くなった。来年の講座にも、できることなら参加したい。

堯　敬一

ーいつも努力の姿勢をー

私は、今回参加する際に、ただ隊員O・Bの話をききたく、またそれによって自分の態度をきめようと思っていたが、いざ講座に参加してみると参加以前に考えていたよりも多く得るところがあったように思う。たとえば、同じく参加している人達に接したことによって、何か心の中に通ずるものを見たように思い同じように志を抱いている人がいるんだと思うだけでも、とても心強く思われた。隊員O・Bの講義あるいは話は、すばらしく、現実をよび戻させもし、それでいて楽しくなってくるものばかりであった。いろいろ聞いていて、参加してよかったと何度も思った。4日間は夢のようにすぎさってしまった感じである。しかし、私個人としては、楽しいことばかりでもなかった。'生花'の要請は少いということ、今から他の技術を身につけるには、25才という年令が結婚適令期という言葉とともに重くのしかかってくるように思われた。しかし江田島の青年の家に行き、また講座に参加して人間は、常に努力しなければいけない、前進しなければいけないと思ったときに、決してくじけることなく、自分

の目指したものに向って進まなければいけないと思った。

いま、4日間を振りかえってみて、よかったと思う。ただ講義のほかに少し皆なで話しあう場所、時間がほしかった。もっとO・B隊員の話をききたかったように思う。また事務局の人の話も聞きたく思った。説明もしてほしかった。兵学校を見学できなくて残念であった。

私自身は、もっと、いろいろな勉強をしなくてはいけない、技術を身につけなくてはいけないと思った。とても困難なことが多いように思われるが、くじけずに少しづつ努力したい。

瀬戸谷　万　千

―協力隊員の共通性の発見―

初日から終わるまでの4日間とにかく暑かった。汗をふきふき講義をきき、スライドを見、食事をし、そして山登りまで行なった。でもなぜか終った今となっては楽しかったという感じが強い。わずか4日間の合宿生活でまったく見ずの各地から集まった男女がすぐに打ちとけあい、話がはずみ、自己の生き方をそれぞれ真剣に考えあったのは、本当にすばらしいことだった。聞いている我々さえ暑いのに武則先生，山本先生、隊員O・Bの方々の熱のこもったお話しぶりには思わず引きこまれてしまう迫力があった。とにかく何でもすべて話して下さり非常に勉強になった。余り迫力があるので協力隊参加を見合わせようという人もいたが、さらにファイトをわかした人が大部分であった。皆な心の中では僕こそ、私こそと思っていたに違いないと思う。

「青年の家」の厳しさに少々閉口しながらも楽しかった有意義な4日間であった。

講義内容について

全部で6つの講義があり、うち2つは武則先生と山本先生の話で海外協力のあり方や役割など主として全体的また根本的問題の掘りさげであった。たとえば、海外協力というものが、いかにむずかしく困難を伴うものかということ、

またそれゆえにこそやりがいのある仕事だということ。こういう仕事こそ自己の利害を離れ、情熱あふれ、また無限の可能性をもつ青年でなければならぬということだが、青年の理想は大きく、理想に走りがちとなり現実を忘れるためいざ失望したときのショックは大きいこと……等々の話はすべてが勉強になりまた良いクスリにもなった。他の4つの講義は、それぞれラオス、マレーシアインド、タンザニアの隊員O·Bの方々のもので楽しかった。さまざまなエピソードを聞いていると私は、その国の国民性や歴史とかいうものに自然と心ひかれてしまう。隊員O·Bの中には、スライドを用意して下さった方がいたが、やはり、その方の話が一番良く頭に残っている。またO·Bの方々と寝食をともにして感じたことだが4人ともしっかりしていらっしゃるなあと思った。こういう言い方は、本当に失礼だと思うが事実そういう雰囲気を感じた。もちろん生まれつき立派な方々には違いないが、しかし私が感じたのは4人の方に共通した「何か」である。やはり海外での経験であろうか。

このたびの夏期講座では、分科会の時間があまりなくて話しあいが充分できなかったことが残念であった。分科会にて専門分野の報告をきくことができれば、どの程度の技術内容が求められているのかをしり、協力隊をめざす人々の参考になると思う。

インド農業隊員O·Bの方などは、そのつもりでデータを多くのせた14頁もの詳細な報告書を各人に配布して下さったが、あまり活用できなくて残念であった。また講演者に対しては質問させるだけで終ったが、私はサークルを作りみんなで問題を討議する方式が欲しかった。テーマを与えられても良いし、自分たちで考えても良いからもっと参加者の発言する場が必要ではなかろうか。宿舎で消燈させられたあと月明かりの中で皆なと話しあったのも楽しくはあったが。

最後に事務局の方には、本当にお世話になりました。講座が終るころには皆な親しくなりすぎて、無理なことや、文句をいったりしたが、その都度誠心誠意良くお世話いただいたことと思う。あの暑い中で統率力のない集団を声をから

してリードしていくのは、大変だったろうと思う。

多田紘史

―表現と実際との不一致―

今度の講座の中で興味深かったことは、協力隊は文明(技術)を見せにゆくのが目的であること、若い力、映画にでてくるのは事実であるが、表現の仕方が、きれいごとのみであり、選ばれた即ち載せてあるのは、実際の一部分であるということであった。しかしより実際に近いであろう話を聞いて、協力隊への興味はさらに大きくなった。

講座の構成に対する感想は、まず来られているO・B隊員の方が少ないので自分の将来、進もうとする分野の話がきかれなかったのでものたりなかった。また報告といったような本でよめる型にはまったものではなく懇談のできるような時間もほしかった。場所としては、青年の家は、時間的制限があるかわりに何となく楽しめる雰囲気があってよかった。時期は個人によってまったく意見が違うだろうが、学生の僕にとっては、夏休みの初めの方がよかった。日数は、非常によいと思う。

事務局の方々は、気さくな方ばかりで、たのしくすごせた。これからも講座を続けてほしい。

広瀬榮司

―協力隊の存在を周知しよう―

一口にいって大変良かった。夏期講座というプログラムを作ってくれた人に本当に感謝する次第である。しいて欲をいえば、参加者が少なかったこと、O・B隊員の分野をもっと広くしてもらいたかったことである。また分科会の内容をもっと具体的に打ちだしておくことが、それに青年の家のプログラムを作りだしていたが、協力隊独自のプログラムをくめなかったことが残念に思えた。しかし反面他団体との交流も出き、青年の家にくる同じ若者の生き生きとした

姿には心をうたれた。O・B隊員と部屋が同じであったことは本当によかった。また話によると協力隊の存在についてあまり認められていないとの事でしたがO・B隊員や事務局を中心として協力隊の存在について一般に知りえるように努力し、僕自身もまた今まで以上に努力し、1青年として恥ずかしくない人間になるように頑張ってゆきたい。

広　瀬　元　義

ー生の声をきく意義ー

8月13日1時集合ということなので、それにあわせ、12日の午後、11時の汽車にのった。初めての研修でもあり、また知りあいの人もいなかったので小さな不安と大きな期待をあわせてもっていた。13日午後1時集合ということなので、僕は早めに行き、午前11時までについていた。午後1時になり協力隊の人が何か目印になる旗でももっているのかなあ、と思っていたが、何も持っていなかったし、特に連絡もなかったのでいささか頭にきた。まあ、それはいいことにして、右を向いても左を向いても見知らぬ人ばかりなので何ともいえず心細かった。

青年の家に入り、なんやかやしているうちポツリポツリと隣りの人とも話しはじめるとようやく堅さもほぐれた。やはり同じ目的を持っている者同志、話があった。講堂で長々と青年の家の規則を聞かされたときは、「なんでまたこんな小さなことまでいちいち説明しているんだ」なんて思いながら聞いていた。講習室に入り、それぞれの人の自己紹介を聞いていると、学生もおり、30才近い人もおり、学校の先生その他さまざまな人がいて驚きもし、また興味も持てた。

1日、2日、3日と終ってみると一番印象に残ったのが「730日の青春」の映画。僕自身以前から非常にのぞんでいたものだった。それだけにすばらしかった。あの映画を見た人の大部分は、おそらくぜひ協力隊に参加したという希望が高まったのではないだろうか。もちろん自分もその1人である。また帰

国隊員と直接話ができたことも何よりの収穫だった。小貫、森川、斉藤、利光各隊員の現地での実際の苦労話、裏話、など紙面では得られないものだけに大変参考になった。話をして実際に感じたことは、その国の事情、また「若い力」との比較をしてみて、ずい分違うということが感ぜられた。

1日目、2日目は、皆な見知らぬ人ばかりなので、なかなかなじめなく(特に女の人とは)、帰国隊員に質問その他あまりできなかった。もう少し緊張をとるような行事を設けてもらいたかった。しかし同じ目的をもった者同志が話しあい、寮の中では楽しかった。

スケジュールの点で、もう少し討論の場を設けてもらいたかった。あとは、できれば、さまざまな業種の隊員がいたらよかったなどと思っている。

僕は大学1年生でもあるし、これからの進路を考えなければならない。将来是非、協力隊に参加したいと思っているが、その中において、この研修は非常に意義のあるものだったと思う。これからの日本青年海外協力隊の繁栄を祈っている。

深　田　周　平

―より素晴しい青春を求めて―

今夏、私は国立江田島青年の家において催された、日本青年海外協力隊の夏期講座に参加する機会を得ることができ、これから自分なりに感じたことを記したい。

私が、この組織を知ったのは、もうかなり以前である。ケネディ大統領の提唱によって始められた平和部隊! そして日本版平和部隊として青年協力隊が間もなく発足したように記憶している。新聞紙上で知ったが、そのときは、子供心にも素晴しいと思った。でもその時は漠然とした想念で、まさか今の自分のように、その運動に足をつっこみかけようとは、夢にも思っていなかった。なぜ自分が協力隊に参加しようという気になったのか、正直なところ自分自身、分かりかねる。なぜなのか? なぜ! その答は、いつも?ばかりである。

確かに協力隊としての仕事は、誰がみても素晴しい。そして我々若者にとって新しい生き甲斐だと思う。理屈では、その仕事の必要性、素晴しさは分かっているが、心のどこかで何か、ひっかかるものがある。そんなとき、この講座を知ったわけである。私は、ためらうことなく応募した。何か自分に、その解答を与えてくれるのではないだろうか。そんな気がしたからである。そこに参加された30名もの人々／みんな本当に素晴らしい。そして若さ溢れた人達ばかりであった。自分自身何か申しわけない気がした。なぜなら今の自分は、願書は提出したものの、心は、まだ迷っていたからである。ここに参加された人々の多くは純粋に、この協力隊に自分の青春の情熱を傾けている。その自分に誇りを持っている。しかし、私にあるのは、情熱よりも不安である。

いま私が、しなければならないことは、自分の置かれた立場で精一杯生きること、これより他にないと思う。書物の点訳、ガールスカウトの子供達の指導、ホームヘルパーとしての仕事……／　青年協力隊のような偉大な仕事ではないが、大きなバックアップもない。いわば、社会の片すみに、息づく小さな仕事である。でもその社会の片すみから、私に灯をともしてゆきたいと思う。これもまた青春の1つの姿ではないであろうか？そして洋裁の技術を、より伸ばすために勉強を続けてゆきたい。いついかなるときに、採用されてもあわてないよう、自分の実力を着実につけてゆきたい、あと1年、自分の願書は登録期間がある。しかしおそらくそれ以上待たねばならないでしょうし、あるいは、それまでに自分自身の考え方が変わってくるかもしれません。それでも、いまという時点においては、私は協力隊員になるためにも、そして自分自身のためにも努力しようと思う。同じ目的のために、日々励んでいる仲間が、あんなにもいるんだということ。そして彼らの情熱、いまの自分は一歩出遅れた気がする。ふりかえってみて、自分は後悔しないだけの何かを残ってゆきたい。

福吉　喜代子

―生きがいある仕事―

私は、開発途上国の諸問題、協力隊の立場、意義などを自分なりに理解できたと思っている。また夏期講座に参加して隊員の生の声を聞き、雑誌などを通して協力隊について学ぶよりも、数倍も実感がわいた。そこで協力隊の存在が大変重要であると感じた。協力隊の仕事は、精神的にも肉体的にもきびしい仕事であり、甘い考えでは、とうてい、つとまらない。それだけに生きがいのあるすばらしい仕事である。

この講座に参加して自分自身大いにプラスになったと思うし、参加した意義はあった。また機会があれば、このような講座に参加したいと思っている。

最後に、この講座について、もう少し欲をいえば、座談会のようなものをもうけ意見の交換をするのもよかったと思う。このような機会が少なかったように感じた。

藤　部　延　夫

―お互いの話し合いの場の提供を―

初めて講座に参加して、日本青年海外協力隊の内容がわかった。

正直に申して、あまり期待もしていなかったが4日間も仕事を休んだだけのことはあった。事務局の方も大変だったと思う。

欲をいえば、もっともっと皆なと話しあえる時間がほしかった。青年の家では、無理だと思うが、国が行なっている事業なら他にも利用するところは、たくさんあるはずである。郵政省や国鉄あるいは教員の保養所などを利用すれば、食事と入浴の時間以外は、自由に出来る。青年の家では、リクレーションの合い間に講座というような感じであった。遊びに来たのでもなければ、楽しみに来たのでもない。もっともっと真剣になって隊員のことを知りたくて勉強しに来たのでキャンドルサービスよりも話しあいの時間がもっとほしかった。

もう1つ、事務局の方に

瀬戸内ブロックでは、小用での集合時間、その他のことでずいぶん手間どっ

たように思う。やはり，ここは日本であるのでフィリピンタイムよりもジャパンタイムでお願いしたく思います。

でも本当に勉強になりました。どうもありがとう。

宮 川 明 子

―若者としての闘志―

広島からフェリーボートで45分、島々の間をフェリーが走り、一眼に映える雄大なる瀬戸内の夕焼けにより4日間の研修に入った。元モロッコ駐在員であった山本雅生先生の講義をうけるため第1研修室に向かいながら瀬戸内の海が真赤に映しだされるさまをながめ、研修にはいる自分に「これから4日間多くのことを学び充実しきった日々にしたい」と誓った。山本先生の講義、4日間の隊員O・Bの研究発表、分科会、武則先生の「海外協力隊のあり方」登山などが行なわれた。O・Bの研究発表を聞いて今まで僕らの中に秘められていたもの、底に眠らされたものがあわてて動き出すのを感じた。講義などは、僕にとっては少し難かしく感じたが、参加者は皆な講師の話を聞いて質問などをして建設的な態度でのぞんでいた。このとき、自分には、こんなことも分らないのかと自分自身少し情けなかった。しかしこの話を聞いて今からの自分に大いに役だったような気がする。3日目に登山が行なわれ頂上から眼下を見おろしたとき、我々の胸に明日への開拓にのぞむボランティアが湧きあがり、若者としての闘士が、ムラムラと頭の方に上るのを感じた。初めてめざめたような気がする自分の道が、どんなに苦しくとも自分で切りひらいてゆかなくては、誰も開拓してくれないことを考えると今までの自分が、みじめでならなかった。しかし3日目の夜に行なわれた東南アジアでの隊員たちのフイルムを見て、ほんとうにあれが、今の若者にかせられた使命かもしれない。自分自身をなげうってその国のためにつくす、それは2年間という短い期間かもしれないが、一生懸命つくしている隊員、改めて厳しさを感じた。

3泊4日にわたる規則正しい共同生活の中で各種討論会、登山、キャンドル

のつどいなどを通じて各県から集まった31名の人の和が結ばれ、多くのことを語りあうことができたことは本当に幸せだったと思う。

和　田　　久

ー派遣分野への考慮をー

養護教員として就職して、はや、5カ月が過ぎようとしている私にとって単調な日々は、ともすれば打算的になりがちで、この2月に知った協力隊が、どうしても忘れられず、もしかすると、私にも派遣分野があるかもしれないと思い、勇気をだして参加した。

(1) 感　想

1日目は心細く、それに加えて青年の家での規則正しい生活に、というより押しつけられた生活に反発を感じ帰ろうかと思った。

2日目は、2人のO・B隊員の発表が教育関係であったので先生の講義と含めて私の想像よりもずっと厳しい現実に全く自信がなくなってしまい、質問したいことがあったにもかかわらず、何もできなかった。

3日目は、小貫さんに保健衛生についての質問をしたくてその分科会に出席した。養護教員の要請はないかと思ってたずねたが、現地は、教育水準が日本よりおくれており、管理面まで手が回されていないそうで、ささやかな希望もついに断たれてしまった。

武則先生のお話では、我々に相当の実力、知識などがなければ、いくら低開発諸国でとはいえ、隊員になるのは無理であるとわかり、うらめしく思った。

(2) 望みたいこと

協力隊を知ってまだ日が浅いためかもしれないが、派遣分野が単に農業、漁業、通信、教育訓練などといわれてもはたして、これまで、どんな仕事で派遣されているかわからないので、もっと具体的に教えていただきたかった。

和　田　恵　子

北海道ブロック

投稿者

伊東正樹
岡田泰招
奥山清寿
加藤裕子
小松田　清
杉山順子
田中敏三
千葉　薫
留目洋子
友田秀俊
南波恵子
野田哲治
畑田哲雄
堀内信男
村　謙次
村上繁樹
八島紀子
吉田武文

—海外協力の今後の課題—

講座を通じて常に曖昧に思えたのが、協力隊の現在の目標は、

1. 技術協力にあるのか
2. 文化交流にあるのか
3. 「立派な」日本青年を創ることにあるのか。

ということであった。おそらく全ての要素が混ざりあっているのだろうが、つきつめてどれに重点が置かれているかを考えると
(3) の行きすぎが目立った。

「苦しいときもへこたれず自分の力を充分に発揮して悔いのない730日の青春を!」この言葉自体は全く正しい。ただ忘れてならないのは、それが方法論にすぎないことである。「本人のため」をあまり前面に押し出すと最終、最大の目標を見失うことになりはしないか?

隊員を動かすのは

1. 他人のふしあわせに対する憎しみ、であり
2. 他人の笑顔に対する喜びであってほしい。その点で私は「730日の青春」をみて大感激した1人である。

その他にも以前は海外協力について、ほとんど無知だったこの私をして、いろいろの疑問な点、協力活動の困難な点を明確にしてくれた。

1. より高度な文化を摂取することで、原地人は「しあわせ」になるのであろうか?「しあわせ」になると感じるのは、先進国の独善ではなかろうか?
2. 小作農の問題などは技術というより社会構造の問題で、その点では、協力活動には、どうにもならない限界があるのではなかろうか。
3. はたして協力活動は効果があがっているのだろうか?

多くの疑問にもかかわらず、これらの世界は人類の連帯意識から海外協力はいよいよ活発になり、大きく平和に貢献するであろうことはフィーリングでわかる。日本の海外協力事業もほそぼそとやってゆくのではなく、海外協

力大学、研究所ひいては、海外協力省の設立も検討してよいとさえ感じている。

伊　東　正　樹

―私の「海外協力」観―

北海道の屋根、大雪山系十勝岳のふもと、青年の家での夏期講座は、春夏秋冬変わらぬ緑で、厳しい自然の中にまっすぐにそびえるトーヒーの原始林のような若者たちと接することができ、あの森林と渓流の清冽な気魄が蘇生するのを感ずる。

昨年の講座から1年、多くのことが不明確であり、疑問な点もあったけれども、今回の講座での協力隊O．B の方々や、桂野先生、小野課長のお話は、個性的でダイレクトな、また逆説的な面、海外協力の重要性、難しさを知ることができ、大きな前進の道標を発見することができた。

自己を認識すること、現地を知ることまた技能及び人間性を磨くことの必要性が身にしみて感じられた。

人と接することの下手な私であり、場なれするころには、講座は終るころであったが、これも道産子の特性だろうか。講座の性格としては、申しぶんないものであったが、少しものたりないものもあった。それは参加した人々の考えというか、主張を発表することのできる場があれば良かったように思う。それにより「こういう人もいるのか」などということが具体的にわかったと思う。

私の海外協力への考えはこうである。開発部落に育ったものとして、うすぐらいランプの灯も、ふとんの上につもる雪も、カボチャとジャガイモの常食も、わらぶき屋根の土壁の家のわびしさも身にしみている。木を切り、根を掘り、荒地を耕し、冷害のひもじさ、火事、どん底の中の人々、自分の不信など多くのものを舐ってきた。のどもとすぎれば熱さを忘れるだろうか。今もって、囲中のやけどを忘れることができない。

現代の世の中には、まだまだ、私の道程よりも苦しい道を歩む人々が、これら開発途上国には、無限にあるだろう。現地の人が欲するものを与えうるようになるために何年かかろうがやってみるつもりである。

開拓のよろこびは、作物の芽が、出る、あのいいしれぬうれしさだろうか。私の青春にあの二葉が萌えるようがんばりたい。

岡田泰招

―相互理解の必要性―

講座が終わり、1週間たち、すばらしかった生活も以前の仕事に戻った現在、講座のときの深い感激がしだいにうすれてゆく自分を感ぜずにはいられない。そんなわけで私の感想は現在に戻ったときの主観的なものが含まれてくる。思うに、あの講座を受けているときには、あのときの感じ方があり、今までの生活のあり方、考え方を別な意味で捕え、思考できる。だが、あの講座をおわり、今は、あのときの感じ方を今の生活に折りまぜて考えることができると思う。

私が、海外協力隊員として参加したと想定した場合、自分は、いろんな意味において、認識不足があり、勉強不足であったと思う。ということは、海外協力は、基本的なものとして、どんな姿勢が、必要なのか、技術と人間性は伴うべきなのか、国家と個人という漠然とした疑問が考えられた。そしてその1つ1つを理解することが必要ではないかと考えていた。その中で一番強く感じたのは、低開発国において自己の存在をどのように位置づけるか、ということである。O.B隊員の皆さんは、異国同音に、このことが誰しもがぶつかる大きな壁であるといわれた。「自分というものを過大評価してはならない」という桃野教授の言葉が印象に強くのこっている。現地の人間が何を本当に望んでいるか、その望んでいるものから手をつけて実行してゆくべきではないか、といわれた。

我々日本人の感覚からくる衛生観念、生活の向上、経済の繁栄、人間の幸

福というものが、押しつけであってはならない。我々の感覚の枠にあてはめることの危険は、過去の経験から現在まで強く認識されなければならない。もし彼らが、現在の生活を一歩でも文化的に向上させる意志が、ないとすれば、我々協力隊の援助は否定されると思う。無理に変えようとすれば、その国家の長い歴史をもつ大きな流れを全面的に変えなければならない。しかし現実において低開発国というものを考えた場合、それは不可能ではないか。それでは、我々の弱小な力は、どのような意義をもつことが必要であろうか、日本の技術協力の中での人間性のあり方を現地の人間に理解させ、同時に我々も理解しなければならない。真に我々の幸福につながる基本的なことは、相手を理解することである。確かに良い言葉であり、大事なことである。また理解したならば、満足というものが得られなければならない。どこで満足すべきかは、個々の考え方、見方の相違であると思う。これは、低開発国という特殊事情こそ違え、我々をとりまく日本での日常生活の中にもいっぱいある問題ではなかろうか。そういうものに苦しみ、悩むことは、海外に行っても考え方の本質として何ら変らぬものではないか。それでは、そういう日常あるものを振り捨てて、海外へ出ることの意義はなにか。現在の生活への反省と、逃避であるともいえる。反面、自己の大きな飛躍を計ろうとするものではなかろうか。海外へ出て異種の人間と接触することにより我々は日本人としてのあり方を考え、異国から日本を見つめなおす機会があるとともに自己にとっても国際的視野を広めうることになり大きな意義があると思う。

ある1つの目的を持った者が共同生活をし、多種多様の生活から来る考え方を相互に交換し、自身、多くの友をつくり得て、大きな意義があったと思う。

残されたものとして、あとはどのように実践して自分のものとしていくか、そのことに私は全力を注ぎ、隊員として参加するための努力をしたいと思っている。

奥　山　清　寿

―真の青年の姿とは！―

このたびの講座に出席して知りえたことは、1つの物事に関して角度、方向を変えて見てみるといろんな見方ができるということである。自論に基づいて率直に向ってゆく姿勢こそ真の青年の姿であると感じてきた。

誰が正しいかではなくして、何が正しいかである。夏期講座の反射光は弱く屈折しながらも私に帰ってきたようである。私の人生に何らかの影響があることと思う。

加藤裕子

―ボランティア精神の芽ばえ―

私が、この海外協力隊と云うのを知ったのは、今から約60日前のことでした。それは、内燃機の講義のとき、うちの大学の教授が語った体験で「以前、ある会社の仕事でインドに2年間行き、インドは、今、海外協力隊というものがあって日本からどんどん協力を行なっている。諸君もやる気のあるものは、志願して行ってくると良い。」という話があった。私も、まんざら興味がないわけでもなかったから、後から教授の研究室に詳しいことを聞きに行った。ここで8月19日から22日まで美瑛で夏期講座があるので、もっと詳しく知りたければ、これに参加するようにすすめられた。私は、休み中、どうせ暇だし、退屈しのぎにと軽い気持で参加してみようとした。私自身、協力隊が、どういうものであるかということについて、あまりよくわからなかったからである。従って第1日目、第2日目の研修は、実の話、協力隊についてあまり興味がわかなかった。それがなんと、3日目、4日目になると、どういうわけか、O．B の方々の話が興味あるものに変ってきた。特に小野課長の「協力隊の心がまえ如何、青年は、こうでなくては」という話を聞き、私にも、自分の持っている体力を海外にだしてためしてみよう、人のためにつくしてみようというファイトがわいてきて、今は英語の勉強をしているところである。

協力隊映画「730日の青春」を以前にも青年の家で見たが、その時には、協力隊は、なぜこのように馬鹿みたいに開発途上国にいって泥沼のような生活をしながら援助しなくてはいけないのか。志願して行くやつも少し異常ではないのか、と軽い気持であったのを記憶している。しかし、今度の研修をおえて同じ映画をみたときには、あの中の青年は何んて立派な人達であろう。なんて美しい映画だろうと思った。これも3泊4日の研修があったからであろう。

映画後の反省会で、ある人が、映画の視聴後涙がでてきたという人があったが、実に私もそうであった。目がしらがあつく心臓のときめくのを感じた。

その他に、ハイキングや人との談話も非常にためになり自分自身反省させられる点が数多くあった。また規則正しい集団での生活をした。ここで、3泊4日の研修は私にとって非常に良い人生勉強になったと思う。協力隊事務局の皆様方に非常に感謝している。

小松田　　清

—隊員としての厳しさを認識—

今回の夏期講座に行ってきてすごく良かったと思う。初めは、かなり安易な気持で出かけて行ったが、帰国した隊員の話を聞き、事の重大性というか厳しさがよくわかった。少々分野のちがう関係から、ちょっとわからない点があったが。

かえって意欲がわき、どうしても自分自身が発展途上国に行って体験しなくては……。と思っている。大変勉強になった。

杉　山　順　子

—講座の方式への注文—

こんどの講座において今まで自分が考えていたことが、さらに深く理解できてうれしかった。自分の頭の中で考えたことと、O．B 隊員の話を聞くこ

ととでは理解度がちがう。まだまだO．B 隊員との話がしたかった。

また、機会があったら、こんな講座をもうけてもらいたい。そのときは、日数をもう少し長くして話しあいの時間を多くとってもらいたい。

それに隊員の行った国は、他にもまだたくさんあると思う。こんど話してくれたO．B 隊員の派遣された国以外のこともまだまだ知りたいと思うし、そこに行くまでの隊員の心の整理は、どうしたとか、自分が行くときまったときの気持は、どんなものであったのか、といった話などを聞きたかった。今回の講座では、彼らの派遣国のことだけが中心になりすぎたという傾向が強かったと思う。まだ、はっきり知らない僕らには、理解しにくい面があった。

しかし、自分の考えで参加した今度の講座は、本当にすばらしいものだと思っている。それは、自然の中で、考えの同じような人があつまり、今の立場は、みんな違っても、こんな講座によって色々な考えを知りえたことに、意味があるからである。

これからも、まだまだ続けてもらいたい。

田　中　敏　三

―「若い力」に何かを―

昨年にひき続き、今年も夏期講座に参加する機会を得た。昨年同様、感想を書いているのだが、容易に筆が運ばない。それは書きたいことがありすぎるからであり、それらのことの多くが、他の参加者によって書かれるだろうと思われるからである。

講座自体の感想は、他の人に譲ることにして、私が思った1つを書いてみよう。今回の講座に参加中、私は「札幌アジア・アフリカ研究会」という名を幾度も口にした。それが、他の参加者にとっては、迷惑だったかもしれない。だがいま改めて、それでよかったと思うし、もっと云っても良かったのではないかとさえ思う。その理由は、同じような考えや志を持った仲間が、

たくさんいることを確認し、それらの人達が学ぶ機会が少ないと感じたからであり、従って我々自身がその機会を作っていかなければならないという現実があるからである。もう多くの言葉で説明する必要はないと思う。我々「若い力」の仲間があっちにも、こっちにもできたとき、今まで1人で考え悩んでいた多くの「若い力」に、現状と将来を見つめることを教え、1人1人の「若い力」にきっと何かを与えるに違いない。

千　葉　　　［判読不能］

―若い力をＡＡ諸国へ―

私は、夏期講座は、参加が、２度目である。昨年は、協力隊は、どういうものであるかを知りたくて参加した。今年は、自分自身協力隊に参加したい気持でいっぱいであったことによる。

このたびの講座では、自分自身の不勉強さを知らされて反省するとともに新たなる気持をおこした。

日本では、私のもつ力は小さいがその微々たる力でも、Ａ.Ａ 諸国では必要としていると思う。そして私は若い。そのためにも自身協力隊に参加したい。こんな気持で実現できるかどうかわからないが、ともかく参加したい。私には、目的ができた。そして、それをめがけて、一生懸命勉強し悔いのない人生をすごしたい。これから私の人生がはじまることを期して勉強したい。本当に感謝している。

留　目　洋　子

―希望職種の隊員Ｏ・Ｂを―

４日間の研修も終えて僕は何を得たのだろうか。初めて皆なと会ったとき、すべての人々が目をかがやかせ意欲にもえていた。そして彼らには、この研修で何かをつかんでいこうとしている迫力を感じた。

私が一番興味をもったのは、ラオスとモロッコの話であった。両国とも、

水で大変苦労していること。いま僕は水をふんだんに使い水の価値などまったく無視している。

このような状態で海外へ行くと水で苦労すると思うので今から心がけて節約して使うことを学ぼう。

次は、ことばの問題である。O.B の方々も大変苦労したことで、僕は中学のとき以来英語がだめである。

また残念であったことは私は農業機械が志望であるのにその話がほんの少ししか聞けなかったことである。来年度は講座参加者の希望職種のアンケートを取ってその方面のO.B の方々の話を聞けるようにしてもらいたい。

また、ほとんどの話が協力隊の良い面ばかりで苦労とか困った点の話が少なかった。実際には数多くの難点もあったと思う。そのような話も多くききたかった。

いずれにせよ4日間の研修を終えて、絶対、海外へ行こうということを考えた。かつ、就職もその方面に通用する分野を受けてみることにした。

いまは、英語を重点に農業機械の勉強にうちこむファイトがでてきた。

友田秀俊

—協力隊への近づき—

久しぶりに考えさせられた4日間であった。皆なとの楽しい交流も忘れることができない思い出となった。

皆なと会う前に心臓がドキンドキンとしていたのは、不安だったのかな？緊張だったのかな？といま思い返してみるとおかしい。

最初他人同志だった人々、それが1つの部屋に集まったというだけで、そのときから仲間になる。素晴しいことだと思う。行ってよかった。

興味をもった人たちだけの話しあいというものが、私には「女3人寄れば……」ぐらいにしか考えていなかったので楽しく聞いていられた。

O.B 隊員の話には、今まで遠かった海外協力というものが身近かに感じ

られた。協力隊員派遣国の風土と生活に今まで以上に興味をもった。本当に楽しかった。

南　波　恵　子

―技術援助の問題点のアプローチを―

3泊4日の講座をふりかえって参加者はアジア・アフリカ諸国に感心をもっている人が多いことを知り心強く思った。日常の生活においてはそのような考えをもっている人達が少ないので、なおさらそう思えた。

その国々へ自分なりに接点をもちどのようにアプローチしていくのか、またいるのかは、講座そのものからは見いだしえなかったが共同の生活のふしぶしにあらわれていたように思う。これらの仲間の輪を広げてゆくことが海外の協力隊員に対する国内の者のできる強いバックアップだと思う。ひいては国内における海外協力の1つである。その意味において講座に参加したことは自分にとって有意義であった。

しかし、多様の職種の人達の集まりであったので、講義、報告の共通点がつかめず、その国々の紹介や生活のエピソードに終ってしまい、報告の中ででてきた技術援助そのものの問題点について充分討論できなかったのが残念である。即ち協力隊はボランティアであるべきなのか、純粋な技術協力であるべきなのか？

これらについては、今後自己において発展させなければならない問題提起であったように思う。その点では何かものたりなく感じた。

来年の講座では、中心テーマを事前に参加者に知らせ、それについて討論がなされるよう準備をすることにより、さらに内容をつめられたのではなかろうか。また参加者自体が討論しあえるような運営をしていただきたい。

野　田　哲　治

―協力隊の方針に再考を―

今回の協力隊員夏期講座に参加して大変よかった。自分は参加が2度目であるが、去年よりも理解できた。特に農業関係で協力隊に参加したO.B隊員の話をきけたことが大変ためになった。

今回提起された問題で疑問に思ったことは第1に発展途上国での農業開発は国をあげて食糧不足をおぎなうのも必要なことだがこれからはその気候ゾーンでしかできない農作物にも、もっと力を入れた方が良いということである。

第2に、それらの国々での部族社会、宗教の壁をいかにしてのりこえるかということ。

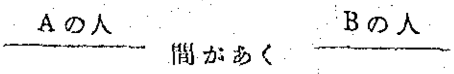
第3に開発途上国へは先進国の考え方で協力するのは少し問題があるのではないかということ。

近代化によって後進国が幸福になれるだろうか。現在の生活をかえって破戒されるのではないだろうか。後進国の人々が近代化についてこられるだろうか。今日に生きる生活から明日に生きる生活に脱皮できるであろうか。

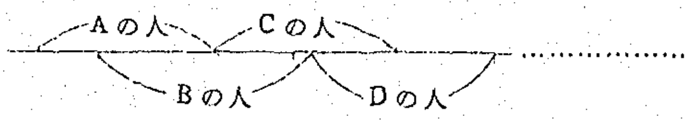
以上の疑問からして今後の協力隊は、今までの方法ではなく改善される必要があるのではなかろうか。

ⓐ 今までの方法は、

1.



ⓑ 自分の考えた方法は

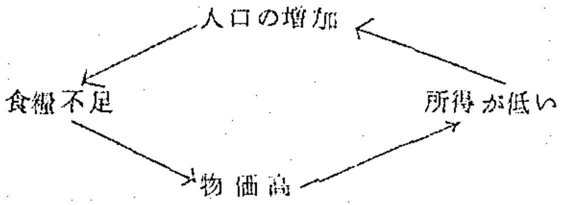


ⓐの方法であれば、Aの人の行なったことが、Bの人にうけつがれないためBの人は、また1から初めなければならない。

⑤の方法であればAの人が1年間行なったことを2年目にはBの人と協力して仕事ができ、Bの人もはやく土地の部族になれ、Aの人から仕事をひきついだあと、Cの人へとうけつぎ、同じことをくりかえさずにすむと思う。

協力隊にもいろんな問題がおきているが1人で2年間原地の生活をするのは大変なことであると思うし、いろんな問題もおきると思う。これからの協力隊は家族での派遣を考えてはどうであろうか。

家に帰って協力隊とは何か。自分で自分なりに考えてみた。ある程度の理解が自分なりに得られた。



上のような図を、つくってみた。このような問題を解決させるためにも、現在の生活を向上させるためにも協力隊が必要だと思う。

畑　田　哲　雄

―自己の考え方をかためるのが第1だ―

今回の夏期講座に参加した目的は先に提出した「講座参加に対する抱負」にも書いたとうり自分がもっている問題に対する回答を得ることであった。

第1に、私が一番の問題点として興味をもったのは「協力隊の性格、性質」についてである。この問題に関しては国内課長からのお話の通りボランティアと技術協力との2つの意味を持ち、たとえば車の両輪と考えてどちらが抜けても「協力隊」の性質は満足なるものを得ることができない。またこれは現地の人々の本当の心と心のふれあいという大切な基盤の上に成りたっているということである。

第2に、小生は大学での専門が船舶工学であるので後進国の第2次産業へ

の推移について話しあってみたかったが、農業関係者が多かったので、これの回答は期待したほどではなかった。これからの講座に出席する隊員O．Bは広い分野から選出してほしい。

講座にて、特に興味を持ったのは協力隊の週刊紙問題であるが、一般的に「若い力」でしか知ることのできない表面的なこととは違った意味での問題提起をしてくれた。ともかく今回の講座で「協力隊」とは私が今まで考えていた以上にきびしい現実の中で活動を行なっていることを知った。それ以上に自分の考え方をより一層確実なものにすることが現在の私にとって大切なことだと思う。

堀　内　信　男

―現地サイドの協力を―

今回の夏期講座に出席して、O．B隊員の貴重な体験記的成果報告を聞き現地での生活は自分が考えていた以上に大変であることを知らされた。それだけに自分もやらなくてはならないという気持にさせられた。

4人のO．B隊員は各々派遣国、派遣業種が違う。従って彼らが感じたこと、体験したことはそれぞれ違ってくると思うが一致した点をいえば、

1. 現地に派遣されるときはそれ相応の覚悟で行かなくてはならない。
2. 派遣される、発展途上国に技術援助をしてもそれが現地の人達にとって幸福なのであろうか？　いや必ずしもそうではない。

と、これらのことが研修の主流をしめていた。講習の目的から少しはずれていたと思うが非常に興味をそそがれ考えさせられた。

隊員が2年間他の国に入って自分の能力の限り尽すことは確かにすばらしいことであり、自分にもあるいは日本にとってもプラスであることは間違いないが現地の人達にはそれだけのプラスが望めるかどうかは疑問である。しかし、微々たるものでもそこに何等かのプラスがあればすばらしい。たった2年で、しかも1人で部落を貧困から救うことは難しい。蓋し、風俗習慣、

あるいは思想もちがうのだから、けれども現地で日本人、日本の国というものを理解してもらえるなら、日本青年海外協力隊の役割りを果たしていると思う。これが何十年と続いたならこの事業も本格的に援助国のために役立っていくのではないかと考える。これらの考えはただの想像にしかすぎない。とにかく現地に実際に行って、そこの人達にとけこんで生活してみなければ本当のところはわからないだろう。

協力隊夏期講座に参加して隊員O.B たちと接して、私は、協力隊に対しての視野が広がり自分の考えも定着してきた。

いま自分がしなければならないことは体力づくり、技術の向上、語学の勉強にあると感じた。

3泊4日は、有意義で楽しい日々であった。北海道の地もきれいならそこに住む人達もすばらしかった。

村　　謙　次

—現地での失敗談をも聞かせてほしい—

私が日本青年海外協力隊について知っていることは、パンフレットにかいてあることと、時々雑誌で見る記事のことくらいである。しかし、それだけで協力隊がどういうものであるのかわかるはずはなかったし、一度も身近かに感じたことはなかった。

しかるに、今度の研修に参加してO.B 隊員の話を聞いて協力隊のことが大体わかり身近かに感じるようになってきた。

具体的な問題点として

1. 開発途上国の政治、経済、宗教、人生観、気候、土壌、それに現地の人が何を考え、何をもとめているのか、をくわしく調べること
2. 最も貧しい人々、貧しい社会の問題
3. それら諸国の発展の条件は何か。また2年間そこで技術指導をして後に何をのこしてくるか。

4. 現地の人にとって平和とは何か

など、これから私たちが考えていかなければならないことがたくさんでたことはこれだけでも有意義であったと思う。

それに付け加え、桃野講師の開発途上国に関する政治形態や支配者と隷属者との構成、所得、教育水準の話などで私たちがこれから開発途上国へ行く場合、考え、行なわなければならないことが具体的にわかり、今まで漠然としていたことの焦点が絞られ大変ためになった。

それから研修中、青年海外協力隊とは何か、また開発途上国にとって技術協力の是非如何について話しあったことは最も良いことであり、これからの協力隊を良くしてゆくうえで大変意義深いことだと思った。

最後に要望として成功して帰ってきた隊員O.Bの話ばかりでなく失敗して帰ってきたO.Bの話も聞きたいと思う。

村　上　繁　樹

―海外協力の理解を―

夏期講座に出席して協力隊に対し以前より事業を深く理解できた。

事務局の皆さま、そしてO.B隊員の皆さまのお話を聞き、大変参考になり記憶を新たにした。これからも、より多くの人達が夏期講座に参加し海外協力を正しく理解して、若い力を発展途上国で発揮できたらと考えている。

八　島　紀　子

―きびしさの再認識―

私は、今年初めて夏期講座に参加した。高校、大学と農業系の学校に進んだからには、この狭い日本ばかりでなく、農業技術の進歩していない後進国へ技術指導に行きたいと思っていた。今までそういった国々へ行くルートがわからなかったが、学校の教授の話を聞いて日本青年海外協力隊のあることを知った。数日して学校の掲示板に協力隊の夏期講座開催のパンフレットが

掲載されていた。自分も将来技術指導にて海外への派遣を希望していたので協力隊が現地においてどのような指導をしているのか、また自分の技術がどこまで役立つのかを知りたく参加した。

8月19日、青年の家につき、談話室に行くともう大部分の人が来ていた。

隊員O.Bの研究発表や分科会、その他、数々の講義があった。また8月21日には白金牧場にハイキングに行ったりして楽しい4日間であった。

隊員O.Bの人達の話を聞いているうちに何となく自分のいまやっている勉強は後進国へ行くと役立つか、また、全然役立たないのではなかろうか、という疑問も出てきた。

しかし、それだけに私が今までやってきた農業に関する勉強不足はこれからの社会経験などにより補えうるように思えた。

夏期講座に参加して、自分の考えの甘さをいやというほど感じさせられた。

吉田武文

東北ブロック

植田大輔
後田守
榎本早苗
小野礼市
小野寺真佐子
神野馥
栗原和子
小島喜美江
佐久間孝司
佐々木進
下村幸生
鈴木繁
鈴木芳明
鈴木陽子
寺島正明
髙橋節子
中里由紀子
永田豊照
橋本友子
松村英子
村上京子
皆川海野茂
穂住稔

ー苗木を育てるものとしてー

暁の濡いをブザーの音によつて破られる。さあ、4日間の講座行きだ。とにかく列車に飛びのつて大阪へ出る。きようの午後には、何とか、猪苗代につきたいところなのだが、まつたく自信がない。結局、夕食が済んだころに到着した。したがつて訓練所長の講義の時間からオズオズ参加させていただいた。

訓練所長の話は、JOCVの今までの苦心がにじみでてくるような、弦楽器、コンツェルトの味わいがある。皆な神妙に聞いているが、終つたとたんの矢つぎばやの質問には、参加者の新鮮な力の萌芽を感じて、感激した。私たちにとつては、何といつても派遣相手国の事情、派遣相手国の実態について、聞きたく一同、まだまだ質問したそうな顔をしていた。2日目と3日目の午前中は、O．B隊員の研究発表があつた。しかしこの1年の間に、世界情勢が何と変転したことか、やはり私たち自身の頭脳の柔軟さを要求される。それらの国々で働くこと、人間関係を作りあげてゆくことの困難さを想像しながら聞いていると、何か、そのようなことを超越してゆく現地の人々への技術向上のための方法をつかもうとする意欲が、私たちを勇きたたせ、隊員諸氏の情熱と力を感じた。

ただ協力隊を考えなおしてみると、発展途上国の需要にあうようにと考えて技術を調整するだけではたりない。

疑問点として、我々が隊員になつて派遣され、自己は自己なりの満足をしたとしても、現地の人々にとつて十分なのだろうか。即ち我々がはなれてからも彼らが継続して、その技術を進歩させて行つてくれるだろうか。私たちが苗木を植え、彼らが育てる者となるであろうか。政治の複雑さ、私の無力を考えて、なお現地の人が本当に希望する安定が与えられればなあ・・・と考えながら、猪苗代出身の、あの医師の苦労をしのびながら、かすみの漂う湖を見ていると・・・・・。

キャンプファイアーでスタンツをするとのこと、"目が出た出た"と環を

作つて威勢が良いのにくらべ、身ぶりが、まつたくあつていなかつた。私も頭にハチ巻で頑張つたが、なかなかうまくは踊れなかつた。次は、うまくゆくと思うが。

さて、今回の特別講義で、派遣講師によるイラン、アフガニスタンの農業の実状の説明とスライド。先生は、農業省に勤務されたとかで、赤茶けた土壌、木の少ない山々の写真を見たときは、森林の大切さを強く感じた。そして、いつまでも、この講座の語らいが続いてほしいと望むほどであつた。感謝でいつぱいである。青年は青年らしくありたい。

〔植 田 大 輔〕

一協力隊事業の本質一

私は、数ケ月前に、協力隊があることを知つた。いつたいどんな内容、目的のために動いているのだろうか？　また自分が隊員になるためには、何が必要なのだろうか・・・。本を読むだけでは、どうしても不安が取れなくて、今回の夏期講座に参加した。

前のような問題は、O．B隊員の話をきくことによつてある程度解決したが、また別の問題や全然考えていないことが頭の中に、湧きでてくるのを感じた。一種の不安感なのであろうか。

第1に、協力隊事業が経済侵略なのかどうか、という問題について、私は経済侵略でなければ、協力隊事業はできないと思う。というのは、資本主義の第1原則である利益の追求がなくては、我が国のような経済体制（原料輸入、製品輸出）では、やつてゆけないと思うからである。すなわち、協力隊が日本人の行動である以上、市場の開拓、拡大につながると思うからである。即ち、日本製品の売れゆきが増大すれば、同時に税金が多くなり、国の予算も増し、協力隊も動きやすくなる・・・・・これが現在の資本主義諸国の現状ではなかろうか。

第2に、多くの人々は、協力隊に参加することによつて自己の未知の力を

知ると同時に、国際感覚を高めようとしているのであろう。そんなとき、一生、自分が行うかどうか、また生涯の第１段階として踏むのか？　といったまよいがでてきた。

次にＡ．Ａ研究会について雑書きしてみたい。今回の夏期講座が実施される前に、私たちは磐城Ａ．Ａ研究会を作った。その内容について書くと、第１の目的は、私たち磐城Ａ．Ａ研究会は単なる青年の団体としてではなく、隊員になつて外地に行くということを前提に作つた。したがつて、それに必要な専門的知識の理解と語学の勉強といつた２点に重点をおいている。たとえＡ．Ａ諸国を研究調査したとしても紙の上だけでは実感が、わかず、実際はどうなのだ・・・といつた追求が、どうしても起つてくると思う。これを解決するために初めから、協力隊参加といつたことを考えた。

最後に同じ２０代初期の青年（立場は学生と社会人というようにちがうが）と、考え方や生活態度を共通の目的のために話しあえたことは、たとえ短時間ではあつても、うれしく感じた。

今後も、このような講座をできるだけ多くつくり、協力隊あるいはＡ．Ａ諸国を考えると同時に日本青年としてのあり方など話し合える場と時間を作つてくれるようにたのみたい。

〔後田　　守〕

－ボランティアと経済進出との抵触－

数年前から、協力隊のことは知つていたが私自身、全く単純に行けるものなら外国に行つて自分の仕事を深めたいと漠然と考えていた。しかし夏期講座に参加して、自分の考えの甘さを思い知らされ、はずかしくなつた。

アジア、アフリカ諸国といつても、どこか遠い国々で、単に低開発国としてしか認識していなかつた。一方、自分達は、ＧＮＰ第二位の先進国であり、他のＡ．Ａ諸国より一段も二段も上の存在として置いていた。私自身が東洋民族であるにもかかわらず！

しかしＯ．Ｂの方、先生方の話を聞き、日本は、Ａ．Ａ諸国の一員であり、その中でこそ生きねばならないと認識できたのは成果の一つだつた。ただ、他の国々と仲良く手をたずさえて、といつてもその方法が問題であり、自身、どのような方法が最良であるのか、全くわからない。現在のボランティア活動の中にも、日本国の経済侵略ということが　かかわつてくる現実がある。しかし現実に食べることにも、こと欠いている人々がおり、上流階級といわれている人々の搾取に対し疑問を感じていない人々が我々の仲間として、いまもいる。

協力隊の存在は、諸々の問題があるにしても、一つの光として意義のあることであり、若い私達が作つてゆき、相手国のために純粋な気持で対処してゆけるのではないか、と思つた。

私自身は、協力隊員として、参加できないかもしれない。しかし日本にあつても、何らかの形で行動に表わすべきであると感じた。理論、空論ばかり並べても、何にもならない、と今まで以上に感じた。今後、自分自身を充実させるのも、もちろん、Ａ．Ａ諸国の諸問題も、身近かなものとして処してゆきたい。

〔榎　本　早　苗〕

―現地体験を聞く意義―

先に、今回の講座の運営を担当された、事務局関係の皆さま、どうもご苦労さまでした。受講生の一人として感謝にたえない。一同も同感であろう。

ところで、このたび、夏期講座に、はじめて出席した。参加にあたつて、私自身、少々まよいを感じ、時間をおいてから、申しこむ意志に傾いた。

Ｏ．Ｂ、大学教授の話を聞いたとして何のたしになるのかと一時感じた。いや、Ｏ．Ｂは、いろいろと体験、苦労をもち、先生は教育者として優れている。講座への参加を申しこんで少し国外の知識、外国の習慣、物の考え方などを広めよう。私が、もし外にでたときの参考のためにと思つて参加させ

ていただいた。やがては、協力隊員の一員となり、また隊に感心を持つている日本若人と膚で接し、その中での勉強は、すごくたのしかつた。O．B隊員からの苦しかつたこと、おもしろかつたことのお話、先生は、先生としての現地での体験談などきいて本当に勉強になつた。

スケジユールの終りに受講生が中心となつて議論、討論を持つたことが、私には、今までに考えもしなかつた経験を持つた。

私より年下の高校生の活溌な発言を聞いていて、ふと感じた。

世の中は、無限に広く、私が、もつと広範囲に物を見て、勉強しなければおくれてしまう。今後も機会があればこのような会に出席したい。

〔小　野　礼　市〕

ーボランティアは理想のために働くー

夏期講座に参加することが、私にとつて、協力隊のみならず、ボランティア活動のための具体的な行動の第一歩であつた。今までは、その活動への参加を希望しながらも、私一人で考えていたが、今回、勇気を出して、同じ仲間の集まりに出席し、本当によかつたと思つている。

参加するまでは、ひとり思い、悩み、不安のため、思考が行きつもどりつと、なかなか進まなかつたが、この講座にでて、私は一人ではなく、同じ願いを持つている仲間が、大勢いることを知り大変に心強く思つた。4日間、大勢の仲間たちと話しあい、また先輩諸氏の講演をきいて、とても勉強になつた。

隊員O．Bの方々が、ボランティア活動のなかで、その名にお溺れることなく、自分を失わずに立派な成果をはたしてきたことを私は見いだした。

現地の生活様式の違いを切りかえ、臨機応変にふるまつてきた隊員、語学を生かし、翻訳にとりくんだ隊員、二年間の生活をきれいに記録し、アルバムを見せてくれた隊員、薬の使い方に、エピソードをおりまぜて話してくれた隊員、現実の厳しさや夢をのぞかせて協力隊への参加を勇気づけられた講

師の方々、どれをとつても、口には楽しい思い出や、おもしろおかしいエピソードでつづられているが、その裏側の苦労がしのばれる。

私には、はたしてできるのであろうか。知れば知るほど不安になるこのごろである。

高橋訓練所長の話が、ときどき思いだされる。「人は金のために働くが、ボランティアは理想のために働く」ということばである。協力隊にも、いろいろな問題があることを知った。アジア、アフリカの国際情勢、うけいれ国の様子、それらを知つたうえで、私たち隊員要員が忘れてはいけないものが、この言葉にあると思う。私たちが平和というものについて、深く考え、見失いやすいものを理解してゆかなければ、ボランティア活動を本当に発揮できないであろう。即ち、私たちの活動には、周囲の大きな援助が必要である。経済侵略と見られても、私、個人の力では、できる仕事に限界があろう。隊員の業務がスムーズに引きつがれてはじめて、一つのボランティア活動があると思う。そのためには、各隊員の心が一つで、同じ目的を目ざすことが必要である。その第一は、理想のために働くことでしよう。その理想とは、平和ということであろうか。その平和のあり方は、各隊員の小さな理想の集合ではなかろうか。とかく目先のことに動かされやすい私たちであるので、理想を持つていなければ、苦しいこと、つらいこと、難かしい問題がおこつたときに崩れてしまうでしよう。理想のため、一歩一歩ゆつくりふみしめて歩むことが大切でしよう。このことは、隊員要員にだけではなく、現在の生活の中にもあてはまると思う。現在は、本当につまらないことにみえても、理想は下げるべきでない。せめて理想だけは、何物にも妥協させてはいけない。それが人とくい違つていても、その人の理想に生きているはずである。私も、理想に生きがいを求めるべきだと信ずる。

私の理想として、ボランティアのために海外へ出ても、その実績は、日本で見い出されるべきだと確信している。アジア、アフリカと同じように日本にも、貧しく、不衛生で、教育さえ充分に行なわれていない地域があること

を忘れてはいけないと思う。これらの地域の人々は、我々と同じ国民であるために、我々が彼らに対して行なう活動は、アジア、アフリカ諸国に対して行なうよりも、むしろ、むずかしいと思う。従つて海外の活動で得られた知恵や成果を生かして根気よく、我々はとりくむべきではないであろうか。私は、ボランティア＝理想＝誠意をつくすこと、と思つている。自分にできるかぎりの誠意をもつて一人一人に向う心だと考えている。

また、急激な、文明化や、機械化は、問題があると思う。せつかく、いろいろの名目で提供された物資が、その役目をはたさず、さびたり、放置されたままになつているはなしを聞く。現地の人々の国民性の問題もあるが、それは、彼らに積極的な意欲を促がさなければ、解決できないでしよう。そのためには、健康管理や衛生施設が浸透していないかぎり、むつかしいと思う。その国によつて宗教、生活様式は違うが、伝染病をなくし、人々を死から守ることは、どの国でも、同じであると思う。病気を少なくするための衛生環境を作る。そのための教育、そして自活するための産業開発とバランスをとつて段階的に文明化や機械化が行なわれるべきだと思うが、今ではどういうわけか、産業開発が独走していることを否定できない。もつとも効果は、はっきりあらわれないでしようが、衛生問題、健康問題に力を注いでもらえたらと思う。看護婦は、多数派遣されているにもかかわらず、衛生検査技師や保健婦の派遣が少ないのは、どういうわけでしようか。もつとＰＲしてほしいと思う。

とりとめもなく、長々とペンを走らせたが、なお一層勉強して理解を深めてゆきたい。このような講演会を、定期的に行つてほしい。

〔小野寺　真佐子〕

ー生きがいある仕事ー

初めて出席したこの研修で、私自身、得たことを書いてみたい。

ちようど、一学期の終りに近づいた、六月のある日、新聞をなにげなく見ていたときに、「青年海外協力隊」について書いてあるのに気づいた。チラホラと就職についての話が出ていた頃であつた。ベルトコンベアの奴隷になつて働くより、生きがいのある仕事をやりたい、と心に強く決めた。それには、一人で悩んでも何もプラスにはならない。それよりは研修に出席して、生の声を直接聞いた方がよいと思って参加した。これが一番の目的であつた。

集合日、当日、時間近くなつてもいつこうに集つた様子がないので、日時をまちがえたのではないかと、バックから、以前にもらつたプリントを見ながら時計と見比べているうちに不安になつてしまつた。

実際に研修に入つてからのスケジュールでO．B隊員の方の話は、おもしろく、現地にて苦しかつたことや、楽しかつたことを、わかりやすく説明していただき、私たちは貴重な時間を持てた。それに、スライドや映画などで、隊員としての働きなどもわかり、出席して本当によかつたと思っている。

しかし、逆に不安なこともふえた。というのは、討論のときに出た意見の中に、日本が未開発の国に手をさしのべるのは、経済侵略や市場獲得にもなりかねないということも考えるべきだ、とのべられたからである。私の友の中には、一人の力でいくらやつてもだめではないか、などという人もいるので腹がたつてならない。でも、その友は、何も知らないから、そういうことをいうのだ、と自分にいいきかせている。

経済侵略・・・あまりよい感じのすることばではない。なにか日本を悪もののように呼んでいるような気がする。そんなことは信じたくない。政治や経済のこともよく知らない私には、何もいう権利はないが。でも自分で何か知らないうちにそのことを考えると・・・今のように技術を援助していると相手国でもその機械や材料をほしくなる。そこに目をつけて、各会社や企業が乗りだしてくるのではなかろうか。特にドル・ショックだと騒いでいる今日

では・・・目の前が真暗になり、心配になつてしまう。しかし、いちいちそのようなことを考えていたのでは、何もできなくなつてしまうでしよう。これも大きな問題で、私には、考えれば考えるほど、わからなくなつてしまいそうである。

井の中の蛙である私には、研修にいつしよにきた友だちと話すことさえ勇気が必要であつたのに、まして大半が大学生という中で、自身、話をすることができ、就職の面接のときにも、落ちついてできるくらいの勇気がついた。自分の意見をもつていない私にとつて、あのような会に出席した場合には、いいたいことも満足にいわずに帰つてくるようになるのではないか。そうなつたのでは、これから社会にでて、こまる。今回は、自分の意見をはつきり発言できるような訓練になつた。これからは、「若い力」を通じて、より一層勉強したい。誰が何といおうと、今のこの熱い気持を忘れず頑張りたい。

〔神　野　　霞〕

―国内の矛盾を考慮にした協力を―

協力隊講座に参加するにあたつては、特に"これ"という目的も持ちあわせていなかつたが、あえて述べれば、協力隊の目的、成果について、いかにして論議され、実践していつたかということである。

目的がすべて達せられたとは思つていない　―いや思つてはいけないのかもしれない。しかし多くの教訓を得たつもりである。

第一印象としては、参加者の意気がみなぎつているということである。―その点において私自身及び仲間たちは、いさめられなければならないのではなかろうか。

第二として、アジア、アフリカ問題に目を開きつつあつた自分に自信と勇気とが与えられたということである。

私自身の専攻が政治学、特に将来、国際関係方面を勉強してゆきたい。その点において今野先生の講義は、たいへん興味深かつた。

先生の話の中にもあつたように、アジア、アフリカ諸国は、現代の国際政治には欠かせない要素になつている。しかし日本のアジア進出（これは純粋に援助とはいえないまでも、それに類するものとする）のことを、ひもとくことになるに従つて、日本国内の矛盾も考慮にいれなければならなくなつてきた。この点に関して、今後大いなる討議が必要のように思える。

私が、協力隊のことを知つたのは高校一年のとき、地理の先生であり、恩師であつた先生が、アフリカで活躍をしている女性隊員の話をしてくれたことが発端となつた。すぐに資料をとりよせて自己満足していたが、今にして思えば、そのときの気持は、甘いロマンティシズムといつたほうがあたつていよう。

しかし、今度の研修会において、ＯＢ、ＯＧ隊員の話を聞くにつけ、私も隊員になつて活動してみたいという気持が胸の底から湧きあがつてくるように感じてやまない。

協力隊の実情を聞くにつれ、今後、改善されるべき、また当然、改善されなければならない点が多々あることに驚ろかされた。

私としては、今後、個人の意識でも活動でも、むだにならぬように努めてゆきたい。

〔栗 原 和 子〕

ーキャンプファイアーの灯をー

見も知らぬ友との３日間の集まり。短い時間ではあつたが、ずつと以前から知りあつていたという気持になつたのは、なぜだろうか。参加者お互に共通した考えが底辺に流れていたことにあると思う。

一人だけの考えで、何となく迷いの中にいたことを知らされた。

若さとは、いかにあるべきか。そして世界の国々の歴史と日々変る政治の中で、日本人の立場としてボランティアとは、どうあるべきか。協力隊を通して／ Ｏ．Ｂ隊員の経験と考えが、私達の考えの基礎がためをしてくれた。

去年の講座より一歩進展した考えになつている自分を感じた。そしてあのキャンプファイアーから持ち帰つた灯をややもすると惰性になりがちな現実に、いかにともすかは、私個人の考え方一つにあると思う。

〔小島　喜美江〕

ー青年の心への栄養的役割ー

私は、いま雨音を耳にペンを取つた。3泊4日の講座は、今の惰性的に通学している生活とは違い自分の理想の生活に、極度近いものであつた。私は、その生活で、今までとは違つて、自分自身の姿を知り、世の中の姿を見ることができた。また講座で、私は、数々の本（講座での出来ごとやO．Bの方々の話）と沢山の仲間を持つことができた。講座は、青年の心に栄養を与える大きな役割をはたしたと思う。

私は、このすばらしい本を読みつづけて本の数を増やすよう努力し、生涯、心の枕とし読みつづけたい。私を、この講座に参加させていただいて本当にありがとうございました。

〔佐久間　孝　司〕

ー若人の灯ー

猪苗代の静かな湖面、磐梯山からの爽やかな秋風、眼下には、子供のころよく夢みた、マッチ箱の行列のような汽車が、すでに稲穂のでかかつた緑のジユータンの中を、のろのろ走つているのを見ると少女的なリリシズムの世界に落ちこんでいるようであつた。・・・

東北という地域性だろうか、この会に集まつた仲間の変化にとんだこと私自身驚くほどであつた。彼らは高校生に始まつて、これからの自分の仕事に隊員として自覚を植えつけようとして来ている者と、さまざまであつた。

私は、ここで一つの言葉を思いだした。それは、"邂逅"である。よく、この人、あるいは書物に会わなかつたらば、自分はどうなつていたであろう

と思うことがよくある。そこに生ずるのは諦念である。人生に対する諦念とは邂逅の歓喜である。たとえ貧老病身災難のうち目にあろうとも邂逅の歓喜のあるところ人生の幸福があると私は思っている。この邂逅と友情こそ、我我若人の灯ではないだろうか。

ところが、実際、このように考えた仲間が何人いるだろうか。私は、いまのような研修内容、方法では、参加者に通り一片のお話で終ってしまっているような気がした。明らかに内容個々の有機的なつながりが全くないのである。事務局は一体何を我々に求めているのか私自身全く理解に苦しんだ。しかし幸運にも後半になり、参加者をはじめO．B隊員、事務局職員が気付きはじめ既成のスケジュールの中で参加者一人一人が何か得るものを得て帰ってゆくことができたような気がする。しかし、他の研修会は、どうであったのかと思うと我々だけが喜んでもいられないと思う。来年からは、プラニングの上でもよりよく検討され、もっとシステマテイックな研修ができるように努力されることを望んでいる。

ところで私は、協力隊事業に対してあるO．B隊員からある種の問題を提起された。その内容は別として自分は一粒の麦なのだ、一粒の麦にすぎないのだ。あるいは、一粒の麦をまくにしかすぎないということなのだ、が、やがて地におちたそれが、いつの日か大きく成長する日もあるのだろうということである。我々は、あまりにもせっかちすぎる。何をやってもすぐにその効果を手にとってみようとする。それは自分が生きていることの理由を、自分の存在の意義を、自らの生命の重要性を感じとるとき、人は自らのうちに偉大さを感じるからではないか。

また二年間の隊員生活は一種の冒険かもしれないと思うようになった。青春時代の冒険は青春時代の過失であるかもしれない。しかし、この世にこれほどなつかしい過失もないと思う。それというのもつまり、人生が冒険であり、その冒険をあえて試みたいということなのだ。責任はすべて己が負わなければならないのは当然であろう。結局、その道筋に多少の差異はあっても、

国内にいても隊員として海外に出るのも同じであるように思える。観念的にあまり理想をおうと錯誤が起るのだろう。理想の協力をしよう、理想の隊員になろうとするから失望が生ずるのだ。凡協力、凡隊員、この謙虚な気持が必要なのだともいうが・・・・・。

しかし、我々が自然に手を加えるのは、自然を破壊するためではなく、より純粋な自然へとするものでなければならないと思う。

これが自分のナルシストの一面かも知れない。しかし一方では、ある隊員のように、帰国後も派遣された経験を生かし続けているし、また別の隊員のように真に協力隊事務局のあり方を問う姿を見るにつけ、思いもよらずふとさしこんできた天啓の光を見るような感じがした。

確かに不満な点が多いなかで、ある意味の充実感をもつことができたと思う。

〔佐々木　　進〕

ー自己の反省の機会ー

8月20日から8月23日まで夏期講座に参加し、今まで味わつたことのない何かすばらしい感激がした。決してオーバーに書いているのではない。

私は、東京に就職して、一緒に遊んだり、難しい話ができる友達ができた。しかし夏期講座に参加したら、私の友達や、自分自身が何か馬鹿らしい小さな人間に感じた。その理由は、すぐにわかつた。私は、その日をどのように楽しく過ごそうかと必死であつた。けれど、この会の人達は、先を見つめ、地味な努力をし、海外で技術援助、奉仕をしようとしていた。私は、この会に参加して、自分の性格がいやになつた。何もできないくせに、すぐ他人を批判する。自分は偉大な人間だという思いあがり、もう泣きたいほど、いやになつた。

私のなすべきことは、協力隊になろうと先走るより、毎日毎日、もつと自分を見つめ、磨きあげることではなかろうか。来年、また夏期講座に参加し

ます。そうしたら、自分を見つめることができるからである。

私にとつて、はじめての夏期講座であつた。自分の悪いところを皆なが教えてくれた感じで、大きな利益があつた。来年また、キャンプファイアーで皆なと一緒に歌をうたいたい。

〔下 村 幸 生〕

ー協力隊は経済侵略か？ー

私は、今年の７月をもつて満１７才の誕生をむかえた。

さて、協力隊夏期講座を受けようとバイトで疲れた体で２６０円の乗車券１００円の急行券を買つて１１時４５分の列車に乗つて郡山を通過したところ、私は居眠りをしてしまつた。その結果、遅刻者の部屋に入室することになつたが、かえつて同じく遅刻者と親和をはかることができた。

「協力隊とは何か」「協力隊とは経済侵略か」といつたことを皆なさんと討論したことは、本当に有意義なことであつた。と感想を書きながら思つた。また大人になつてもこの思いは変らないでしよう。しかし皆さんには、それぞれの生きかたがありましよう。私個人としては、協力隊には参加いたしません。このような場に、こんなことを書くのは非常識かもしれない。ただ、これだけは書いておきたい。即ち、協力隊というすばらしい機関が、この世の中にある。そして、隊員の苦労というものが、若者の発散であるということ。

協力隊の存在を、私の学校の連中及び、若者に大声でさけびたい。

〔鈴 木 繁〕

－隊員への再認識－

夏期講座、青年の家という規律ある生活の中で、3泊4日という短かい期間、大変に楽しく有意義であつた。

隊員O．Bの方たちによる報告で、参加国の内情、風習、及び仕事上の苦労話など、聞いて社会勉強になつたうえ、俺にもなんとか、やればできるかもしれないという勇気も湧いてきた。

特に、O．Bの伊東氏の「参加するときは、親に勘当され、周囲に反対されながらも、自分の道を進んだ」という話は、長男である自分にも共通しているようで、印象的であつた。

また、今野先生の、青年の生きかた、外国の実情、そして自分の経験などの話は、人生経験が豊かな人の興味をそそるものがあつた。これが本当の勉強だなあと感じた。

レクリエーションの裏磐梯の五色沼へのハイキングは、あいにくの雨ふりで実行できなかつたが、そのかわりに、参加者同志人生について語りあい、人生経験の異なる仲間の話をきき、勉強になつた。特に我々の会社内で話していると、自分の考えが狭くなりがちで今回の対話を通じて人間的にも鍛えられた。

私が、講座に参加する以前、隊員O．Bの方たちに対するイメージは、我々と非常にかけはなれたものであつたが、いざ彼らと話してみると、親しみやすく本当に外地に行つてきたのかなあと思うくらいであつた。

しかし皆さま、人間的に立派な人たちばかりであつた。今後も、このような講座が続くことを期待している。

〔鈴　木　芳　明〕

ー講座参加を機に再出発をー

東北の研修に参加して、まず感じたことは、私の青春は、もう終つたのかしらということである。

今は、何事にも意欲が湧いてこない。去年の夏、憧れ、行けたらもう死んでもいいと思つていたヨーロッパへひとり旅をして、たくさんのことを持ち帰り、自信もついたはずだつたのに、それから後の生活は、とても不安定で苦しい状態が続いた。そんなとき、モスクワで知りあつた音楽の先生に協力隊のパンフレットをいただき、表紙の言葉にひかれて参加した。しかし、研修にでて、私は、ますます自信をなくした。去年の旅行は、いま考えなおしてみると、多分に「青年は荒野をめざす」的、に、一人気背つて旅をしてきたように思える。また参加した人達が他人のこと、日本のことをよく知り考えているのに驚いた。そしてまた皆なを見ていると自分に対して自信たつぷりなのをうらやましく思つた。私は今まで自分のことしか考えなかつた。正直いつて他の人のことを思う余地はなかつたから。それに協力隊というものは、純粋にアジア、アフリカの国々のために働いていると思つていたし、日本の経済侵略は、考えてもみなかつた。でも、これからは、もう少し丁寧に新聞を読むことにし、またこの講座に参加したのを機に私も腰をあげて歩きはじめることにしたい。

〔鈴　木　陽　子〕

ー講座を２０才代への指針にー

今回の研修がおわり、２、３日たとうとしている。今これをかきながら研修のことを思いだしている。

私の場合、現在、協力隊へ参加したくて講座に参加したのではない。自分でもわからないが、好奇心というのか、若いうちに何かを得たいという気持で参加した。今の自分は若いうちに何かをやりたい、という気持でいつぱいである。

特に、いま夏休みをむかえ毎日ダラダラした生活をしているこのごろでは、日がたつのが恐ろしい程どである。それに反して、今回の研修には、多大な期待をもつていた。

参加しての一番大きな収穫は、男女、学生、社会人と、いろんな人と話をしたことである。それよりも将来おとずれるであろう20才代、そして、20才代をアジア、アフリカにぶっつけた生き方をした協力隊員O・Bの方々の話をきき、自分も何かわからないが、得るものを得たような気がする。私の20才代への良き生き方を導く資料となつた。

生れてから18年間に、このような青年の家での生活は、始めてであり、行く前に多少、不安があり、また参加しなければよかつたなんて考えながら青年の家に来たが、今では、参加して本当によかつたと思つている。

〔寺　島　正　明〕

ー講座参加の意味ー

夏期講座が終つて2週間になるが、まだ私の頭の中からは、研修の一つ一つが浮かんでくる。私にとってこの4日間は、本当に充実した日であつた。皆さんの講演を聞いていて、私も是非と思いながら不安にも楽しく研修をした。

私が、協力隊を知つたのは、ほんの2、3ヶ月前のことで、友人が、協力隊員となつて、ぜひ現地人とともに暮らしてみるという決意をして、その技術的なことを考え、就職先を決めたのを聞いて、今回の講座に参加したことによつてである。

私には、何一つ特技がない。量子の方を専攻しているが、浅く、広くなので何となく勉強に身が入らない。それに私が教える場合、果して人々をリードすることができるかどうか。何も協力隊員になることだけではないが、このようなことは一般常識として身につけておかなければならないと思う。それに皆なの意見などを聞いていて、自分の発言力のなさにしみじみ縮まる思

いであつた。このようなことを知つただけでも、講座に参加したかいがあつたと思う。私は、高校三年でもあり、これからでも遅くないので何かの特技を身につけて、また勉強というものを大事にしたい。

〔高 橋 節 子〕

ー隊員になることが、私の夢ー

私は、今回の講座に参加するにあたり、二つの目的を持つていた。一つは、私の友達が、それぞれ進路について真剣に考えだしたので、刺激されて、私もこの辺で一転しなければと思ったからである。二つ目は、協力隊に少なからず関心があり、隊員となつてアジア、アフリカの国々へ行くことが、私の希望であるので隊員に直接接してみたい、アジア、アフリカに関心を持つている人と語りあいたいと思ったからである。こんな目的をもつて講座に参加した。ここで感じたことの第1は、自分の勉強の足りなさである。アジア、アフリカに関しては、もちろん、その他、いろいろの面で・・・だから、これから一生懸命勉強したい。また0．Bの方からいろいろとお話を伺い、参考になり意義深いアドバイスをうけて、とてもよかつたと思っている。

第2は、0．Bの方々が、次のことを話されたことに感動したことである。即ち、彼らが、現地で活躍してきて、(イ)自分を見つめなおすことができた。(ロ)他の問題を自分の問題として考えられるようになつた。(ハ)人間と人間との触れあいの素晴らしさを知つた。・・・などと。自分もそうなりたいなあと感じた。また協力隊に関心を持つている沢山の人々を知つて、皆さんが協力隊について真剣に考え、誇りを持つていると感じた。

協力隊については、深く考えさせられる問題も出てきたが、この講座に参加して、少しづつ協力隊に接することができ、理解できたことをうれしく思つている。なかでも、映画「730日の青春」を見て、水平線に最後に沈む大きな真赤な太陽が、とても印象的で、私もいつか技術を身につけ、隊員になつて、あんな太陽を見ることができたらと思つた。

研修の期間が短かかつたことが、とても残念であるが、参加して本当によかつたと思つている。またこのような機会があつたら参加したい。

〔中 里 由紀子〕

ー同志が交わす会話の意味ー

今回の講座に参加するに際して、私は、3つのことを理解しようと思つていた。

先ず第1は、協力隊への考え方、第2は、私は、漁業を専攻する学生なので、O．B隊員に現地の農業の実状と、私どもが行く場合、どのくらいの技術を習得していけばいいかということ、第3に、O．B隊員の現地での生活を通して、現地に行くまえの考えと、帰国後の考えの違い、また、いま考えている2年間というものの意味。もつとあるが、この3点だけは理解しようと思つていた。

第1の協力隊の考え方については、国の青少年の教育事業の一環としてなされているということがわかつた。協力隊というものの考え方は、皆な個人的には、諸々もつていると思うが、公的なもので、はつきり定まつていない。それに、協力という名のもとに経済的な問題が表裏両面にある。このようなことを討議することは非常に難かしい、ということを知つた。私は、技術的な協力も大切だと思つているが、それは、協力という考え方が確立されてからの問題のような気がする。

第2の点として、今回の講座に、水産O．B隊員は、来られなかつたので、漁業を発展の足がかりとしている国がなくものたりない面もあつたが、間接的に他のO．B隊員から現地の実状をきくことができてうれしい。

次回には多岐にわたる職種のO．B隊員を講師にお願いして、時間にあまりとらわれることなくお話しできたらと思つている。

第3の点として、時間的な制約がありO．B隊員の話を聞いたり、質問したりする余裕があまりなく残念であつた。できれば、夜を徹して話をできる

ようにしてもらいたいものである。

今回の講座には、我々学生と、いろいろな職業につかれている社会人が一同に参加してさまざまなことを話しあつた。私たち学生は社会人と話す機会が普断ないので、こうした機会にお話しできたことが大変有意義であつた。同じ目的なり考えなりを持つた人間が集まつたということもあろうが、すぐに皆なとけこみ自分の云いたいことを云い、他人の言い分も聞くといつた本当の意味の会話が、この講座にあつたような気がする。

この催しを企画された事務局の方々に厚くお礼申しあげると共に、"同志よ、それぞれの道で懸命に生きようよ"と声を大にして叫びたい。

〔永　田　豊　照〕

―未知の国での栄養指導の夢―

私は、今回の講座に参加するのに、大変迷つた。いま考えてみると、どうして、あんなに迷つていたか自分でも不思議である。

参加したときには、自分なりに、これから先の生き方を考えてみたかつた。というのは、今まで協力隊員になるのだ、なりたいと思つていても、それには、たえず、不安が、ともなつていたからである。

本当に、海外にでて働いてみたいのか？　日本で平凡に働いて過ごしたいのか？　もつと強い何ものかによつて決めるのだと思つていたからかもしれない。その反面、現地での生活はどうか？　危険なことはないか？　おそろしいものはいないか？　言語は？　食生活は？　彼ら原住民の生活は？　交通は？　など、いろいろな面から聞きたいと思つていた。

前者よりも後者の方が強かつたのだろう、というのは、私は講座に参加したのだから、講座が終つたいま、何が何だかわからない状態の中からある決心をした。後者の疑問にはなに一つ不安はなかつたけれども、やはり・・・という心が残つていた。しかしハイキングが中止になつたとき、ある言葉が耳に入つてきた。私は勇気ずけられ、これだ／　いままでの不安がふつとん

でしまうような決心をした。私だつて協力隊員になれる。もちろん現地での生活は楽ではない。

いま、こうして笑顔で話をしているO．B隊員は、二年間の苦労によつて得る精神的な満足で満ちあふれているのではないか？　と感じた。その人間らしさ、実際にやりとげたO．B隊員でなければ味わえない満足さが、しみじみと伝わつてくる。とつてもうらやましい気がする。私もそのようになりたいと感じた。そう思うと心は海外へと飛んでゆく。

目の前は、そまつなわらぶき屋根が、いつぱいである。栄養士をめざしている私は、そこを歩きまわつて栄養指導をする。すばらしいではないか。しかし背後には、いつぱいの苦労をしよいこんだ民がいる。

そんなことから協力隊員になつて海外で働くこと、そんな夢が一段と大きく輝く、固い決心となつたのである。

全般的に、とつてもなごやかな雰囲気の中で、講義をきき、ゆつくりと考えることができて大変よかつた。

また、アジア、アフリカ研究会のことも考えることができた。もつとＡＡ研究を活発にしてゆきたいと思う。

次に、期間中、我々と生活を共にしたO．B隊員の数が少なかつたことが残念である。次回にはもつと数多くのO．B隊員と話をし、聞きたい。できれば栄養士として海外で働いて帰国された方の話を聞きたい。

また、レクリエーションや会員同志の雑談、反省会のような形式で話しあう時間をもつと多くとつてもらいたかつた。そうすれば、もつと早くうちとけることができたのではなかろうか。それには、やはり、期間を長くとつて、多くの研修をしたいし、またそうできればなあーと感じた。今回は、時間の制限があまりにも多すぎたように感ずる。これもO．B隊員一人一人の話がとつてもよかつたからなおさら時間が気になつたのかもしれない。ユーモアたつぷりであつた。

最後に、農業関係のように、派遣分野が、栄養指導の面でも活発になるこ

とを願つて感想としたい。

〔橋 本 友 子〕

ーボランティア精神のあり方ー

事務局、参加者も１０～２０代という構成のチームプレイ（レクリエーション）も良く、「黄色いサクランボ」の流行語になるほどのユニークにあふれる研修であつた。

ただ分科会の内容や形式を事前に知ることができたらと思つた。

またＯ．Ｂ隊員が、研究発表をするにあたつて、分科会のときに発表しながら質問、意見をとりいれる形式の方が話題も絶えることはなかつたと思う。

ごく一部の人の意見で終つたことは、大変残念であつた。私も慣れないために、一貫性のない意見ばかり云つていた気がする。いま一人で苦笑しているところである。良い経験であり、またいろいろ考えさせられることが数多くあつた。

その一つとして、開発途上国に対して、以前より関心を持つてきた。

協力隊は一種のボランティアであるが、技術協力に伴つて日本の経済侵略とも考えられるのではないか。この起点から、協力隊とは、日本の政治、現状問題と拡大するほどになつた。

現在の社会で、あらゆる組織と連帯とを持つている時代に、ボランティア精神独自で何から何まで理想を歩ませることは、不可能ではなかろうか。

民間社会（医療）福祉事業の病院に勤務している私の立場としては、民間独自で今日の社会で、無料または低額な診療を行なつている。しかし長い年月に伴つて無理が生じてきた。「日本の経済侵略ではないか」の代行をうける例もある。「社会福祉だ、社会奉仕だ、と云つているが名ばかりではないか」と世間からの批判をうけている。

資本主義社会において、民間独自として、理想を掲げても結果として、現実に眼を向けて、生活の苦しみの立場に追われて行動するときに、百パーセ

ント理解され、良い結果が現われることは考えていなく、不可能でしょう。私の両親でさえ、私の仕事を半分も理解していない。ただ私の歩む青春を親として心配し可愛い子に旅をさせてくれるのである。

若い私達は、自分から苦しみを求め、勇ましく、私達自身で道を作つてゆかなければ、だれが他人のために作つてくれるでしょうか。こんな世の中であるからこそ協力隊事業が大切な存在であり、少しでも理解してもらうことが大切なのではなかろうか。

最後に、研修生の皆さんが青春の夢を求め、勇ましく生きている姿が、私にいまの仕事に希望を与えて、励ましとなつた。日本の小さな町で小さな病院で、小さな力で、一歩一歩頑張つてゆきたいと思う。

〔松　村　英　子〕

一誰でも行けてこそ！一

どんな人達が集まつて来るのだろうと、いらいら立つた気持で猪苗代の駅で待つていた。青森からここまで来るのに大変不便を感じた。乗り換え駅で1時間、2時間と待つていたあの辛さ、12時40分という集合時間が、近づいてきたときには、さすが「ホッ」とした。

総勢40名近くの方々といつしょに3泊4日の夏期講座に入ることになつた。正味2日間、協力隊というものについてお話を受けた。予想していた以上に厳しいものではないということが実感として受けとられた。特に女子に対しては、都市部にしか派遣されないということを聞いているが、男子と同様に、現地にも派遣されるべきである。都市部にだけということになれば、両親の反対も和らぐし好都合であるが、どうもしつくりしない。後味のよくない思いである。女子が甘い考え方を持つというのもうなずけなくはないように思えたが。

誰でも行けてこそ始めて地球は一つになりうるのだと思う。交通の発達した現在、文明の程度の差を茶の間で見ることができる。自分の家の近所で困

つている人がいたときと同様に低開発国に対して素朴な気持で手をさしのべてあげればそれで良いのではないかと思う。また技術援助によつて人間関係を育てるということに大変興味を持つた。

この夏期講座に参加して本当に良かつたと思う。2年間で何ができるのかと自分自身に問つてみて、O．Bの方々は良くやつておられると思つた。自分にできるのかどうか疑問である。でも、いまいえることは、何かやりたいという意欲に燃えていることだけは確かである。私にとつては、とても有意義な3泊4日であつた。

ただ一つ注文すれば、ひとりで反省する自由時間が、ほしかつたなあ、と思った。

〔村　上　京　子〕

ー自己の再考察の機会としてー

久しぶりの本来の生活を離れ、一つのことについて一定の時間、拘束され、考え聞くということ、楽しいような、また少々こわいような不思議な気持、だが終つてみて1回、1時間半の講義、まつたく夢中だつたような感である。

平素マンネリ化した生活を送るうち、時々自分の生活の仕方、ものの考え方が、どう進んでいるのかわからなくなつて来ることがある。はたしてどうなのか、自分はこれで良いのか、自身を測る基準がどうなのだろうか、それもわからず知らぬうちに、自分が考えているものと違う方向にいつているのではないか。そんな日々、友人の着々と進んでいる姿がいやに目に入る。皆な、その学生時代の言のごとく云う。そんなとき、ある友人から協力隊参加への抱負を聞く。とつさにある雑誌の批判的な記事が頭に浮かぶ。あのとき、そのまま受け流していたことが気になりながら、詳しく聞いた。それが、そのときの自分の何ものかの一つとして考えて、パンフレットをとり寄せ、内容を考えた。隊員の方々の実際の生の声をきいて研修生の反応も見たかつた。来て、おどろいたことの第1は、その年令層の若いこと。80％ぐらいが学

生だということ。そして、その人たちの考えていることは、本当に若者らしく真剣に物ごとを考え悩んでいるということ。さらにこの協力隊を通じて、その意義、過程、協力そのもの、その影響、日本のこと、世界のことが論じられているということ。平素は考えたことがなかつたが、いつたん、その環境の中に入り無意識のうちに受けとる種々のことで大いに反省させられた面があつた。

そんな講座であつたが、はじめは、講義やディスカッションは夢中のうちに過ぎてしまつた。3泊4日にしては、何となく、参加者の「意志疎通」のためへの労力が多かつたように思える。もちろん青年の家たるゆえんかもしれないが。

現代の青年は団体生活、その中における人間本来の言語、動作、青年特有の青臭い考え方に、いかにうえているかが感じられた。自分も含めてそうであると思う。

講座の内容について注文したいこととして一言のべたい。

協力隊の背影層を増やすことにおいての講座であれば、やむを得ないとしても、現実に講座の空気によつて、自身のこれからの運命を決める人もいるにちがいないから、もう少し方法を考えてほしかつた。

たとえば、具体的に事務局の方から、どういう選考方法、訓練内容、現地への出発の過程、2年間の全般を通じた生活内容、帰国後の就職状況、訓練所入所時と帰国後の現職場との関連性など。そういつたことに関して多少なりとも事務局で援護していただけるのか、それともすべて自分でやるのかなどをしりたかつた。

最後に、今野講師、高橋訓練所長の講義を聞いて、自身、何年かぶりに活を入れられた感がある。もう一度我々は世の中、日本を、世界を見つめ直し考え直して、何かをなさなければならないと思う。それが我々現代青年の義務であり、唯一の特権ではなかろうか。自分自身を考えさせる3泊4日は良い機会であつたと思う。

一諸に運営にあたつた事務局の人達も皆な若く、講座そのものが、より一層、協力隊事業の発展につながるものと思う。

ここで私は、願書を出したいと思つている。行けるか行けないかは、これからの問題として、より多くの人達の潜在的隊員層、理解者の増加を期待したい。

〔皆　川　海野茂〕

一自己の考えの甘さを再認識一

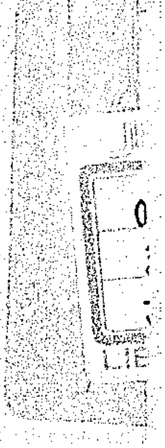
私は、低開発国に技術援助などをしているシステムがあることは、知つていたが、日本青年海外協力隊があるということは、今年の夏まで知らなかつた。友人から聞いて、この講座に参加した。自分では、何のために参加したのか、はつきりした目的は、もつていなかつた。最初、自己紹介があり、皆なの意見、考え方、目的などを聞いて、自分の考え方のあさましさに恥じている。

3泊4日という短かい期間ではあつたが、規則正しく過ごし、夏のだらけた気持ちを直し、いろんな人から話を聞くチャンスもあり、自分というものを考えさせられた。

協力隊O．Bの方々は、現地に行つてこられて大変に楽しいお話をしていたが、実際は、すごく苦しくホームシックにかかりそうになつたことであろう。一口に2年といつても見たこともない地に行き、自然と人間を相手に暮らすことは、並みたいていのことではないと思う。

若い二十代に一度は、そのようなことを体験しても良いのではないかと思う。

あの、国立鞍梯青年の家という環境のよいところでの研修であつたので、気分も良く、ゆつたりとしたスケジユールにのぞめた。食事もまあまあであつたし、参加費は安いし、何よりも、自分のためになつたと思う。

来年もできれば参加したい。

〔穂 住　　稔〕